

晩年の毛沢東思想と階級闘争

趙 平

論文要旨

中国で出版されている社会主義理論に関する教科書は、毛沢東思想は、中国社会主義政治の指導思想でありマルクス・レーニン主義を発展させたものであるとしている。しかし、毛沢東思想がマルクス・レーニン主義をどのような意味で発展させたものであるのかは、検討に値する課題であろう。

この論文は、中華人民共和国が樹立されてからプロレタリア文化大革命までの社会主義の時期において、毛沢東の思想、特に階級闘争について思想がいかに形成され、またそれがいかにプロレタリア文化大革命の大波綻に必然的につながったかを分析したものである。さらに、この分析を通して、毛沢東思想の特質と、その矛盾、ないしは毛沢東思想と中国の伝統的な政治のあり方との関係、これらを探ろうとしたものである。

この論文は、次のような章によって構成されている。

はじめに 毛沢東ブーム

この「はじめに」は、80年代末から90年代にかけて起きた毛沢東ブームの特徴を分析し、毛沢東研究が、現代中国を理解するのに不可欠な一環であることを論じ、次の章につなぐものである。

一. 階級闘争の準備——社会主義に対する毛沢東の認識から

この章は、政権を執ってからの毛沢東思想の変化について取り上げて

いる。つまり、新民主主義革命から社会主義革命への直接移行に関しての毛沢東思想の変化と、社会主義に対する毛沢東の認識の変化、および、その変化がいかに毛沢東の階級闘争思想に結びついたかを分析したものである。

二. 毛沢東の社会主義階段論の形成過程

この章は、主に大躍進と人民公社の具体的な事例を取り上げ、毛沢東の社会主義階段論の形成過程を分析している。解放当初の毛沢東は、社会主義を完成するまでに、かなり長い期間を要するという認識を示した。しかし、1955年の後半から、毛沢東は、共産主義がすぐに実現できるという認識が変わった、その後の厳しい経済状況で、毛沢東は教訓を得、理論的な揺れ戻しを見せたにもかかわらず、階級闘争にさらに力を入れるようになった。この章は、これらのことを論証している。

三. 「喜んだり恐がったり」することから中ソ分裂へ

この章は、中ソ分裂がいかに毛沢東思想に影響し、引いては中国のその後の政治状況に影響を与えたかについて分析している。フルシチョフのスターリン批判は、毛沢東に、ソ連の影響から離脱する絶好のチャンスを与えた。しかし、ソ連の二の舞を踏まないように、毛沢東は、中国で「反修防修」というイデオロギー運動を展開し、ソ連との論争を通して、毛沢東流の階級闘争思想を固めたのである。この章は、こうしたことを分析している。

四. 新階級闘争論

この章は、「反修防修」のための社会主義社会における階級闘争の問題について、毛沢東の独自の見解を分析している。

毛沢東の階級闘争理論は、マルクス・レーニン主義に基づくものであるように見えるが、階級闘争理論に毛沢東の独自の考えを入れている。特に共産党内部の階級闘争という命題は、毛沢東の作った共産党を破壊しかねない危機にまで追い込んだのである。この章は、これらのことを論証している。

五. 主要矛盾の変化

毛沢東の階級闘争理論を考察するには、毛沢東の「主要矛盾論」を研究しなければならない。社会主義の時期の毛沢東の「主要矛盾」の設定においては、経済建設から階級闘争への変化が見られる。「敵味方の矛盾」を社会主義社会における主要矛盾と見なすことによって、毛沢東は、中国の「変質」の危険性を現実的なものにし、人民大衆を動員し、「爆発的な克服」を通して、社会主義社会における階級闘争という矛盾を解決しようとしたのである。

六. 階級分析の偏向

階級分析は、毛沢東が一貫して重要視する手法である。この章は、毛沢東の提出した、社会主義の時期に存在する「二つの搾取階級」論を取り上げ、毛沢東の理論は、現実と合わないのみでなく、論理的な分析も欠けていることを立証した。

七. 知識分子に対する認識と反右派闘争

この章は、中国の知識分子の階級的属性に対する毛沢東の認識と毛沢東の階級闘争との関係を分析したものである。知識分子に対するか間違った認識から、毛沢東は、知識分子を一連の政治運動で攻撃し、最後には、知識そのものをも否定するところまで突っ走ったことを論述している。

八. イデオロギーの領域における階級闘争

知識分子に対する批判は、毛沢東にとって、イデオロギーの領域における階級闘争である。毛沢東が、イデオロギーの領域における階級闘争を、その他の領域における階級闘争と同じように、革命という破壊的な手段で解決しようとしたことを本章は論証している。

九. 「共産党内部にあるブルジョア階級」論と「資産階級法権」(ブルジョア法的権利)論

この章は、毛沢東の「共産党内部にあるブルジョア階級」論が依拠する原点とされているマルクスの「ブルジョア的権利」という概念と、毛沢東の言う「ブルジョア的権利」との違いを分析している。また、毛沢

東が「ブルジョア的権利」の理論に基づいて反対する官僚主義は、ブルジョア階級の毛沢東のと言うより、むしろ中国の伝統的な封建政治の中にあるものであることを論証している。

おわりに 伝統に呪縛された晩年の毛沢東思想

以上の9章の分析に基づいて、この論文は、この「おわりに」の部分で、晩年の毛沢東思想の根底は、マルクス・レーニン主義の思想ではなく、中国の伝統的な文化と思想であると結論を下している。さらに、この「おわりに」の部分は、中国の伝統的政治の特徴と毛沢東思想との関連を、以上の9章に論述にふまえて論証している。

本論の全体として要旨、各章ごとの論述が総合されたものとしての、以下のようなものである。以下のこの要旨は、やや体系的論理展開に欠けるところがあるが、あくまで、本論文そのものの理解を容易にするために書かれたものとして読んでいただきたい。

中国の社会主義の時期における毛沢東思想には、次のように四つのポイントが含まれている。

- 一：社会主義は経済が急速に成長する社会である。
- 二：社会主義は平等な社会である。
- 三：社会主義は人民民主の社会である。
- 四：社会主義は階級と階級闘争が存在する社会である。

第一のポイントは、大躍進とその後の大飢饉とに直結した。なぜ社会主義は経済的に急速に成長する社会であるかについて、毛沢東は、有力な論証を展開できなかった。率直に言えば、第一のポイントは、現実離れの幻想に過ぎない。

第二のポイントから第四のポイントまでを理解するカギは、階級闘争である。なぜかといえば、平等で人民民主の社会を実現させる毛沢東のもっとも有力な手段は、他でもなく階級闘争であるからである。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

階級闘争に関する理論は、毛沢東思想のもっとも重要な部分を構成している。階級闘争は毛沢東にとって、社会を認識する方法である。それでも、中華人民共和国の建国当初の社会主義の時期における毛沢東の階級闘争理論は、まだその骨格が形成されておらず、毛沢東は、階級闘争理論を重視するのにくらかの躊躇も見せていた。毛沢東の階級闘争理論が成熟してすべての政治工作の要となったきっかけは、50年代の中ソ両国間のイデオロギー論争であった。このイデオロギー論争は、夥しい論文を通して行われた多岐にわたるものである。概括的に言えば、論争の中心は、社会主義社会に対する認識、すなわち、社会主義社会に階級と階級闘争がまだ存在しているかどうか、プロレタリア階級独裁を堅持すべきかどうか、これらについてであった。

中ソ論争の中で、中国側は、次のような論点を提出している。

- (イ) 社会主義社会は長期にわたる歴史的段階であり、この歴史的段階では、ブルジョア階級とプロレタリア階級との階級闘争が継続し、資本主義と社会主義とのどちらが勝つのかという闘争が続いている。
- (ロ) 社会主義社会の階級闘争は、必然的に共産党内部に反映される。
- (ハ) 社会主義国家での資本主義の復活を防ぐために、次のような方法を採るべきである。

I. マルクス・レーニン主義の対立物の統一という法則で社会主義を観察する。

II. 社会主義社会は相当の長い歴史的段階である。その段階では階級、階級闘争、社会主義と資本主義という二つの路線の間の闘争、これらがまだ存在していることを認識する。

III. 社会主義革命と社会主義建設において、大衆路線を堅持し、大衆を激励し、大衆運動を大々的に行う。

IV. 都市と農村で普遍的に、反復的に社会主義教育運動を展開する。

毛沢東の階級闘争理論は、中ソ論争に通して、中国共産党と国家の政治生活とのあらゆる面に浸透することとなり、それは間接的に、プロレ

タリア文化大革命の思想と世論を準備することになったと考えられる。

1959年の廬山会議で、彭得壊をはじめとする中国共産党の指導者の一部は、中国の遅れた経済を大衆運動によって促進する毛沢東の「三面紅旗」は失敗であり、失敗の原因は、毛沢東主義者の「プチブル的熱狂性」に求められなければならないとはっきり指摘した。彭得壊らの指敵に反撃し、毛沢東は、党内からこうした指摘を階級闘争の党内で反映と見做し、社会主義を守るために党内でも階級闘争をやらなければならないと主張した。こうして、毛沢東は、階級闘争を外部から共産党の内部へと引き入れ、ブルジョア階級が共産党の内部から新たに生み出されうるという考えを打ち出した。

毛沢東の階級闘争理論を考察するとき、毛沢東の矛盾論、特に「主要矛盾論」に注目しなければならない。というのは、毛沢東にとって矛盾論は、単なる哲学的な概念ではなく、彼は、矛盾論に基づいて、中国社会におけるさまざまな社会現象を分析し、中国共産党の路線、方針、政策を決定していたからである。毛沢東にとって、矛盾は変化の原動力であり、社会の発展を推進する特殊の矛盾が、主要矛盾である。新民主主義革命の時期、毛沢東は、彼の「主要矛盾論」に基づいて、革命を勝利に導いたのである。さらに、毛沢東は、「主要矛盾論」を社会主義という環境のなかでも応用した。しかし、社会主義の時期における主要矛盾は経済建設にあるのか階級闘争にあるのかという問題に対して、毛沢東は迷った末、階級闘争を選択した。主要矛盾を階級闘争とする選択は、毛沢東の悲劇を決定的なものにしたと考えられる。

階級闘争を行う際、敵味方を見分ける階級分析が非常に重要である。しかし、階級分析に関する毛沢東の理論にも、致命的な誤りが見られる。中国の階級を分析して、毛沢東は、社会主義の中国に、相変わらず「二つの搾取階級」に存在すると論じた。毛沢東が二つの搾取階級説を提出した目的の一つは、社会主義社会における主要矛盾が階級間の矛盾を階級闘争であることを論証するためであった。階級闘争を社会主義社会に

晩年の毛沢東思想と階級闘争

おける主要矛盾にするには、階級闘争を行う対立した階級の存在を見付けなければならない。しかし、この「二つの搾取階級」説は消滅した階級と消滅する過程にある階級の「分子」とを理論上の階級として復活させたばかりでなく、「ブルジョア階級の右派」を「その他の反動派」というレベルに引き上げ敵対階級として扱うことになったのである。その上、知識分子を一つの階級として労働階級から引き離し、ブルジョア階級の陣営に押しやった。

階級分析理論にみられる毛沢東の偏向は、かなりの部分は、知識分子の階級的属性に対する認識から来ている。晩年の毛沢東は、知識分子の問題に関して、認識論、方法論と知識観という三つの面で迷路の入り込んでいる。まず毛沢東は、実践から認識を得るという命題を極端に単純化し、認識が形成される過程の中での知識分子の作用と価値とを否定している。次に、知識分子の階級属性を判定する方法において、毛沢東は形而上的手法を取り、知識分子の出身家庭と彼らが教育を受けた時代の社会環境を基準に知識分子の階級属性を判断する。さらに、毛沢東は、知識を生産手段のような物質的な財産と同一視し、「私有知識」を批判し、封建主義・資本主義・修正主義のものと目される知識を一掃しようとする。知識分子に関する間違った理論に基づいて、毛沢東は、知識分子をブルジョア階級陣営に属する敵対階級として扱った。このような階級として扱われた知識分子は、文化部門におけるイデオロギーの領域を占領すれば、当然重大な階級闘争を引き起こすことになる。というのは、これらの知識分子から修正主義が生れるとされるからである。このような「理論」に基づいて、解放後の1951年の映画が『武訓傳』に対する批判をきっかけに、毛沢東は、「反右派闘争」、「プロレタリア文化大革命」など、一連の政治運動を繰り広げ、その死に至るまで、知識分子に対する批判を執拗に続けた。

知識分子に対する批判は、イデオロギーの領域における階級闘争とも言われる。なぜかといえば、イデオロギー闘争は、毛沢東にとって、知

識分子との「思想上の闘争」でもあったからである。毛沢東は、「思想上の闘争」を、次のように理論的に分析した。

(イ) 文化領域へのブルジョア階級の思想の影響が、修正主義を生み出す重要な内因である。

伝統文化と外来の文化は、すべて封建主義・資本主義・修正主義のものである。

(ロ) 文化界に現われた問題は、共産党内部の問題の反映である。

この毛沢東も(イ)の考えは、知識分子批判の政策につながり、さらに、(ロ)の考えは、文化にメスを入れることを通して、生産党内部を粛清する政策につながった。

文化界に現われた問題は、なぜ共産党内部の反映であるとされたのかといえば、それは次のような考えに基づくものであった。つまり、社会主義社会という政治環境の中でも、労働者大衆とは社会的地位の違う知識分子が、相変わらずイデオロギーの領域を独占している。そのような状況を可能ならしめているのは、「ブルジョア學術権威者」という知識分子を支持するブルジョア的権力者が共産党内部にいるからである。さらに、毛沢東は、共産党幹部の中にみられる特権階層や官僚主義の出現などが、ブルジョア階級が新たな形で生れてきている証拠であると考え。特に、毛沢東は、共産党の内部を考察する時、1954年の高岡・饒漱石事件や1956年の「百花齊放・百家争鳴」と反右派運動、1959年の廬山事件など、それらの事件や運動をソ連の『政治経済学』という教科書と照らし合わせ、共産党内部に人民大衆と鋭く対立する「既得利益集団」が形成されているという結論に達した。1959年に提起された「既得利益集団」の命題は、自ずから1964年の「官僚主義者階級」論をもたらし、最後には「共産党内部にあるブルジョア階級」論に到達することになる。

官僚主義に反対する毛沢東の目的は、平等な人間社会を作ることにある。官僚主義に反対する毛沢東の努力にのみ着目すれば、その行動自体が必ずしも正しくないわけではない。官僚主義に反対する毛沢東の理論

晩年の毛沢東思想と階級闘争

は、次のような三点に要約しうる。

- (イ) 毛沢東の官僚主義反対は、官僚主義から生れたさまざまな弊害を一掃するものではなく、階級闘争を通して「官」と「民」との地位を均一化し、「民」のために我を顧みずに奉仕する道徳的に崇高な「公僕」や、思想的にマルクス主義に忠実で純粋な「清い官」になりうる共産党幹部の出現を期待するというものである。
- (ロ) 毛沢東は、共産党幹部の「腐敗」ぶりを判断する指標として、「汚職すること」以外にも、「ブルジョア階級の思想に傾倒すること」や「政治に無関心で経済活動にのみ熱中すること」、いわゆる「思想的に墜落している」ことを加えている。
- (ハ) 毛沢東は、官僚主義のような腐敗現象も階級属性と混同し、特権を持つ現象を官僚主義と結びつけ、官僚主義をブルジョア階級のみのものであると断定する。

このような毛沢東の三つの論点には次のような問題点がある。

- I. たとえ、毛沢東の考えた「官」と「民」との地位が均一化された社会を実現できたとしても、中国の政治的基本構造や、統治者と被統治者との間にある根本的な差を一掃できるわけではない。
- II. (ロ)の判断基準に基づけば、経済のメカニズムに基づいて経済活動を指導する幹部は、容易に「官僚主義者」と見なされることにより、打倒の対象となり、結局経済の破綻を招くことになる。
- III. 中国の官僚主義のもっとも顕著な特徴は、「特権」を濫用することである。特権は、位階制と同じように、本来は封建社会とともに存在するものであり、封建社会の特徴でもある。特に中国の場合、共産党の幹部は、農民やプチブル出身者が主な比重を占めている。伝統的な封建専制主義思想を持っている農民や伝統文化を満喫するプチブルがいったん暴力で国家を押さえれば、いち早く追求するのは、資本の増殖ではなく、「官位」や「権力」を手に入れ、それを保持し利用することである。これは、まさに中国式の「官僚主義」

の本質である。したがって、社会主義社会における官僚主義は、ブルジョア階級のものではなく、むしろ中国の伝統的な体質であると考えられる。

「党内に潜り込んだ資本主義の道を歩む実権派」や「共産党内部にあるブルジョア階級」という毛沢東の理論の依拠するもっとも重要な原点は、マルクス主義のいわゆる「ブルジョア的権利」という理論であると言われている。しかし、毛沢東の「ブルジョア的権利」とマルクスの「ブルジョア的権利」とは、用語は同じであるが、内容はかなり違うものになっている。マルクスは、「ブルジョア的権利」の概念を等しい量の労働を交換すれば事実上の不平等が現われるということに限定しているが、毛沢東は、「ブルジョア的権利」という概念を社会のあらゆる領域にあてはめて、「ブルジョア階級の権利」に対する態度をマルクス主義と修正主義とを見分ける標識にし、中国の小農経済に根強く存在している平均主義を実現しようとした。毛沢東は次のように考える。つまり、中国では、社会主義制度が樹立されてはいるが、「ブルジョア階級の権利」が存在している限り、所有制を除くすべての点で旧社会と同じような状態が続いているから、階級闘争が必然的に存続していくし、「ブルジョア階級の権利」の存在が、実権を握る党の幹部を腐食し、その一部を人民大衆に対立する側に回してしまう。だから、社会主義における社会主義革命の標的を、共産党の内部にシフトしなければならなくなる、と。

以上のような事実とその論理的考察とは、晩年の毛沢東の思想、特に毛沢東の階級闘争に関する思想と理論の形成について、次のような結論に導くことになる。

- I. 毛沢東は、中華人民共和国を樹立したが、社会の行政管理体系を、戦争状態で形成された個人的カリスマ的権威から合法的権威に転換するという問題を解決できなかった。そこで、毛沢東は、人間の精神的な力を強調し、生産の現代化に昔の革命精神を注入し、「万衆

晩年の毛沢東思想と階級闘争

一心」で中国式の、社会主義を実現しようと企てたのである。人間の精神的な力に頼って社会主義を実現しようとするれば、どうしても階級闘争を通しての「不断革命」を実行することになる。

- II. 解放後に行われた毛沢東の一連の政治運動は、伝統的文化を破壊しながらも伝統的文化の深層にある封建主義の束縛から脱しえなかった矛盾に満ちた革命運動である。孔子、孟子に対する批判は、孔子、孟子思想に基づいて行われたものであり、「造反有理」に駆りたてられて中国全土で猛威を振るった紅衛兵の「造反」は、結局のところ伝統の尊王思想に縛られた奴隷の行動に過ぎなかった。
- III. 毛沢東が引き起こした一連の政治運動に反映された毛沢東思想の原点は、マルクス・レーニン主義ではなく、究極の所、墨家思想や老子思想における中国の小農経済の理想郷に関する学説である。毛沢東は、長年の農村生活のなかで、農民本位の思惟方式や、農民への共感、農民を知る洞察力などを形成した。毛沢東は、歴代の農民戦争を通して受け継がれた墨家思想や老子思想を外来のマルクス・レーニン主義の理論と融合させ、毛沢東的な社会主義革命を実践したのである。
- IV. 毛沢東時代の政治の特徴は、どのようなところにあるかといえば、それは、政治が道德化され、道德が政治に置き換えられるところにあると考えられる。政治を道德化する手法を取ることによって、政治が「善」と「悪」という範疇のものとして扱われ、本来特定の歴史的時代のものであった観念がいわば時代を超越する倫理道德観として現出してしまう。政治を道德化したこの種の「政治的道德観」は、中国社会と中国の伝統文化に深く根を下ろしている。中国の封建社会は一貫して、倫理道德をイデオロギーの基本的核心としている。政治制度がいったん道德化されると、その政治制度があたかもも自然発生的なもので永久不変のものであるかのような潜在的意識を人々の社会的認識に植え付けることになる。さらに、政治が道德化さ

れることを通して、道德の要求は、社会の生活の中で至上の原則になり、政治方針や法律規範から生活習慣にいたるまでに浸透しそれらを制約する。そこに、いわゆる道德の専制主義が成立する。

- V. 中国の伝統文化とその文化思想に浸透された中国の人民大衆の「自覚」を基礎として、小生産を保護する封建政治が、毛沢東的な政治の道德化を政治優先などの形にとって、中国の現代史の舞台に再び登場することができたのである。毛沢東の率いたプロレタリア文化大革命も、そのような伝統文化とその伝統文化に浸透された人民大衆をベースに行われたものであった。
- VI. プロレタリア文化大革命は、一見すると理性を失った「革命運動」のように見えるが、安全に理性をなくしたものではない。その根底にある理論の中心は、中国史上に繰り返される伝統的な政治的道德理論に基づいたものである。その基礎の上に、公と私との関係、集団と個人との関係、共産主義の理想、二つの階級と二つの路線のあいだにおける階級闘争、などといった理論と思想とが付け加わっている。晩年の毛沢東思想は、このようにして中国の伝統文化に毛沢東個人の経験とマルクス・レーニン主義理論の一部とをミックスさせたものであり、それは、中国の人民大衆の理性的信仰となり道德的宗教の如きものとなったのである。

以上がこの論文の概要である。

次に、毛沢東思想に関する従来の代表的な三つの研究を取り上げ、この論文との異同を述べてみたい。

- (i) 中国で出版された毛沢東思想に関する著作の代表的なものは、『毛沢東思想発展史』（金春明ほか、中共中央党校出版社、1993年。）である。この著作は、社会主義の時期における毛沢東思想、特に毛沢東の階級闘争思想を分析し、毛沢東思想に見られる理論的な混乱

晩年の毛沢東思想と階級闘争

と偏向を次のように分析している。

- (1) マルクスとレーニンは、資本主義から社会主義社会へ移行するためには、過渡期が必要であると論述している。ところが、新中国の建国当初、世界的に、社会主義と共産主義という二つの用語が混同されていた。そのために、毛沢東は、過渡期理論を誤解し、過渡期における階級と階級闘争とを過度に強調した。
- (2) 毛沢東は、修正主義や帝国主義の「平和演変」（平和的な手段で漸進的に社会主義を転覆させること）を、過度に警戒した。
- (3) 毛沢東は、政権党となった共産党の内部に顕れたマイナスの面に過度に反応した。
- (4) 毛沢東は、理想の社会主義モデルを、過度に追及した。

以上のような分析を展開した上で、『毛沢東思想発展史』は、毛沢東思想は間違った思想ではないという結論に達している。

毛沢東思想に対する『毛沢東思想発展史』のこの分析は、中国国内での毛沢東研究の方向を反映している。この研究方向は、次のような手法をとっている。つまり、毛沢東思想を整理して、社会主義堅持に都合の悪い部分を振り落とし、そのような部分がマルクス・レーニン主義理論に対する理解の不十分さから来たものであるとすることによって、毛沢東思想を蘇らせようとする。また、このような研究は一般に、毛沢東思想がマルクス・レーニン主義の延長線上にある正真正銘な生産主義思想であると考えている。さらに、晩年の毛沢東の誤りの原因を、社会主義を建設するための経験の不足と「四人組」に騙されたこと、これらに求めている。

- (ロ) 池上貞一は、『現代中国政治と毛沢東』（法律文化社、1991年）という著書のなかで、社会主義社会における毛沢東の階級闘争理論について、ソ連理論を受け入れた「二段階過渡期論」と毛沢東の「一段過渡期論」との間の揺れ動きに基づいて、その形成過程の詳しく考察している。共産党内部における路線を巡る対立も、二段論から

一段論への変更の過程で行われたものであると考えられている。日本の毛沢東思想研究には、こうした角度からメスを入れた著作が多く、素晴らしい研究成果も出されている。例えば、共産党内部の闘争を毛沢東の過渡期論と関連づけて分析した論述に、大変興味深いものがある。『現代中国政治と毛沢東』は、さらに、20年代に毛沢東が指導した湖南自治運動及び「湖南共和国」問題に対する毛沢東の反応、つまり「大中華民国」に反対して「湖南共和国」の樹立を主張したことについて分析し、マルクス主義の影響を初めて受けた頃の毛沢東思想の特質を的確に捉えている（毛沢東は、1920年9月、『湖南大公報』に、「湖南共和国」の樹立に関する二篇の論文、「湖南建設の根本問題——湖南共和国」及び「湖南が中国から干渉を受けていることを、歴史及び現状から証明する」を執筆し、「湖南人に自力で湖南を国家に建設しよう」と提唱した）。

- (イ) モーリス・メイズナー (Maurice Meisner) は、彼の『Mao's China and After—A History of the People's Republic』(House, Inc., New York 1986) という著書で、新中国が樹立されてから鄧小平時代までの歴史を考察し、その検証を通して毛沢東思想にアプローチしている。メイズナーは、その著書のなかで、中国の社会主義的経済制度を「post-capitalist」的なものと分析し、毛沢東の社会主義革命を「post-revolutionary」と呼んでいる。メイズナーによれば、毛沢東は、ブルジョア革命を成功させたが、社会主義革命で挫折した。その原因は、前進する社会経済と経済の発展より遅れている政治状況との間の深刻な矛盾に求められなければならないとされる。本書の最終で、メイズナーは、「毛沢東主義の政治的手法とイデオロギーとは、この理論が誕生した時の遅れた環境の反映である」、「毛沢東主義の方法と習慣は、現代中国の状況とますます食い違ってきている」と結論している。

私のこの論文は、こうした従来の研究成果に立脚してはいるが、かつ

晩年の毛沢東思想と階級闘争

違った角度から、すなわち、毛沢東思想と中国の伝統文化とつながりという角度から、毛沢東思想を分析したものである。毛沢東の思想は、マルクス・レーニン主義と関連はあるものの、その真髄は、マルクス・レーニン主義的なものというより、むしろ中国伝統の「民本思想」である、と私は考える。マルクス・レーニン主義は、結局のところ、毛沢東的な「民本思想」を実現させるための便宜的な道具に過ぎない。毛沢東思想と中国の伝統文化との関連という視角からこの研究は、毛沢東思想の研究に寄与する新しいものであると私は考えている。

中国は現在、ポスト鄧小平の江澤民時代になりつつある。江澤民は、経済領域で一部修正があるものの、鄧小平の改革解放政策を引き続き実施している。その反面、政治領域では相変わらず毛沢東思想に依拠し、生産党一党支配の社会体制を維持しようとしている。一時的に「政治の民主化」や「政治改革」が喧伝されていたが、学生運動の挫折とともに、それらは、江澤民時代のタブーになっている。「党の喉と舌」と江澤民に限定されている『人民日報』は、96年9月30日に、「把祖国建設得更美好」（「祖国をさらに美しく建設しよう」）という題の社説を載せ、毛沢東思想は、中国のもっとも強大な精神的武器であり、中国魂であると称している。さらに、「四つの堅持」（「マルクス・レーニン主義堅持すること、毛沢東思想を堅持すること、社会主義を堅持すること、生産党一党支配を堅持すること」）の合唱と中国で執拗なまでに繰り返されている毛沢東ブームとが証明しているように、毛沢東ないし毛沢東思想は、決して過去のものとはなっていない。それどころか、毛沢東思想は、今日でも、中国の政治に大きな影響を与え、中国の行方を左右している。この意味で毛沢東思想の究明は、中国の現代政治を解くカギの一つとなるものあり、中国の将来を見通すための研究ともなるものであると思う。

(論文抜粋)

七. 知識分子に対する認識と反右派闘争

階級分析理論にみられる毛沢東の偏向は、かなりの部分は、知識分子の階級的属性に対する認識から来ている。晩年の毛沢東は、知識分子をブルジョア階級陣営に所属している敵対階級として扱っていた。彼は、自分の革命戦争の勝利を、「労働者、農民の軍隊が、知識分子の軍隊を、負かした」と形容するほど、知識分子嫌いを明瞭に表明したのである。⁽¹⁾

農民出身の毛沢東は、自ら知識分子の一員になっていながら、知識分子に対して、極めて強い不信感を持っている。ただし、毛沢東は、科学技術にはほとんど無関心であるので、彼の知識分子に関する講話の多くは、科学者や技術者に対するものよりも、文学と文化の領域の知識分子に向けられるものの方が多い。歴史的な視点から見れば、確かに中国の文人たちの文化活動は、庶民社会から超越した遊戯ではなく、政治と直結しているものが多くある。「工学技術に携わっている人は、比較的社会主義を受け入れやすい。理科系の人はその次で、いちばん駄目なのは文学系の人だ。」⁽²⁾という毛沢東の話は、中国の伝統文化と結び合わせて考えれば、理解できないものではないかも知れない。

中国の政治理想は、「礼楽の治」であり、礼楽は即ち文化のことである。孔子が周という国の政治を論ずる時、「郁郁乎として文なる哉」と譚えた。ここで、政治と文化との関係が、どちらがどちらを道具にするという関係ではなく、引きはがせない血肉の関係と認識されていたのである。「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」という言葉は、古代から中国の文人の座右の銘であった。詩人としては、また著述家としての毛沢東が、中国の古典に深い造詣があるということから、中国の歴史の中においては、文化即ち政治であるという理念が彼の血液の中に浸透し、彼の知識分子観を大きく左右していること容易に想像することができる。

しかし、中華人民共和国建国当初、勝利の喜びで意気昂揚した毛沢東

晩年の毛沢東思想と階級闘争

は、前にも述べたように、知識分子に対して比較的温和な態度を取っていたように見える。反右派闘争が始まるまでは、毛沢東は、知識分子に対して、余り厳しい態度を示していなかった。たとえば、知識分子と労働者の階級差をなくす問題について、毛沢東は、1957年1月の講話の中で、80%以上の大学生は相変わらず地主、富農、上層中農とブルジョア階級の子弟であると指摘したものの、「このような状況を換えなければならないが、時間が必要である⁽³⁾」と述べている。また、「關於正確處理人民内部矛盾的問題」という講話の原稿で、毛沢東は、知識分子の自己改造の重要性を強調し、知識分子を放任してはいけないと言いながら、知識分子の理想は高くなく、高い給料をもらうことと結婚パートナーを探すことでしかなく、言い換えれば、「ものを食べることと子供を作ること」に過ぎないと知識分子を揶揄している⁽⁴⁾。

しかし、以上のような発言だけで、1957年の初頭まで、毛沢東が知識分子を大目に見ていたと判断するのは、やや短絡的な嫌いがある。知識分子に反対する大規模な大衆運動がなくても、毛沢東は、知識分子に対して何時も目を光らせ、自分の路線からはずれた知識分子を潰そうとしている。中華人民共和国の建国から間もない1951年の始め、乞食をして学校をつくった清末の民間教育家武訓（1838—1896年）という人物を描いた『武訓傳』という映画が上映された。雑誌『大衆電影』は『武訓傳』をこの年度の国産優勝映画の一つと讃えたのを始め、各紙も『武訓傳』を50年度のベストテンの一作として評価した。しかし、この年の5月20日の『人民日報』は、「應該注意電影『武訓傳』的討論」（「映画『武訓傳』の討論を注意すべきだ」という見出しを社説を出し、『武訓傳』は…農民の革命戦争を侮蔑し、中華人民共和国の歴史を侮辱し、中国民族を侮辱する反動宣伝である…我が国の文化界の思想的混乱が耐えられない程度になっている」と厳しく批判している。この社説を執筆したのはほかでもなく毛沢東である。

『人民日報』の呼びかけで5月から8月までの間に、『人民日報』に

百篇以上、『文匯報』に百篇以上、『光明日報』に30篇以上の『武訓傳』を批判する論文と自己批判の文章が掲載された。また江青は、『人民日報』社と文化部で組織された「武訓歴史調査団」に参加し、山東省にあるある武訓の故郷へ赴き、20箇所ほどの実地調査をし、県誌や著作、帳簿、碑文、文集、土地契約などを詳しく調べ、「武訓歴史調査記」という題名で調査報告を毛沢東に提出した。毛沢東は、その調査報告を朱筆を入れ、1951年7月27日と28日の『人民日報』にそれを連載させた。調査報告は次のように結論している。

「武訓は『学校を作る』ことを手段として、当時の反動政府に特権をもらい、それをもって地主階級や反動政府に奉仕したとてつもないゴロツキであり、どん欲な高利貸しであり、また大地主である。」

このような結論を前にして、『武訓傳』を評価した教授や学者たちは、自分の誤った思想と学術的観点を自己批判せざるを得なかった。『武訓傳』の映画監督の孫瑜（1900—1990年）は『解放日報』に、自分はブルジョア階級の反動的な改良主義を宣伝し、歴史を歪曲し捏造したとして謝罪文を出した。⁽⁵⁾

『武訓傳』の批判から、中国の文学芸術と学術理論の批判は、独立した地位を失い、激しい政治批判に取って変わられた。本来文学芸術に属する問題を政治問題にエスカレートさせ、大衆の直接参加を最高の批判形態とする風潮の端緒を開くなど、その後の思想・文学批判運動のために最初のルールを敷いた。『武訓傳』の批判の直接の影響として、映画が1950年には39本制作されたのに対し、52年には5本しか製作されなかった。

『武訓傳』の批判が終わって間もなく、1953年に中国の文化界でまた批判が始まった。今度は二人の若者から始まったのである。1953年5月、『文藝報』第9号に中国の古典小説『紅樓夢』を研究する専門家、北京大学教授の俞平伯（1900—1990年）の「紅樓夢研究」が掲載された。この文章を読んだ二人の若者、李希凡と藍増は「關於『紅樓夢簡論』及

晩年の毛沢東思想と階級闘争

其他) (『紅桜夢簡論』とその他について) という論文を書き、翌年の『文藝報』18号に載せた。⁽⁶⁾二人はそのすぐあとに「評『紅桜夢研究』(『紅桜夢研究』を評す)」という評論を『光明日報』に掲載した。一週間後に、毛沢東は「關於『紅桜夢』研究問題的信」(『紅桜夢』研究問題についての書簡) を書き、それを共産党内部に公布した。手紙の中で、毛沢東は次のように述べている。

「ことは二人の『小人物』によって起こされたのだ。ところが、『大人物』はとかくそれに注意を払わず、しかもしばしばそれを阻止している。彼らは観念論の面でブルジョア著述家と統一戦線を組み、甘んじてブルジョア階級の虜となっている。…古典文学の領域で30年間青年たちの心に害毒を与えた胡適派のブルジョア階級論に対する闘争が、もしかするとこれをきっかけに展開できるかも知れない。⁽⁷⁾」

そこで、中国の文学界で『紅桜夢』を中心に政治批判が始まり、前出の毛沢東の手紙の中で「胡適派のブルジョア観念論に対する闘争」という表現を使ったことから、俞平伯批判の延長線として、中国の有名な哲学者の胡適(1891~1962)のプラグマティズム(実験主義)への批判までもが展開された。⁽⁸⁾1955年の春まで、『人民日報』に俞平伯の「紅学」(紅桜夢研究学)を批判する論文が相次いで掲載された。これらの論文は、俞平伯の『紅桜夢』に関する研究が、異なった階級の政治思想と文化思想の表れであり、また過渡期の複雑な階級闘争の文学研究の領域での反映であり、ブルジョア階級の知識分子がイデオロギーの領域で社会主義的改造に抵抗する象徴であると決めつけた。それらの論文はさらに、俞平伯や胡適を、帝国主義の「文明」と「理論」を鼓吹するものと批判した。三聯書店によって収録し出版された「胡適思想批判論文匯編」が8巻にものほり、論文数は150編に達した。俞平伯や胡適と関係のある知識分子も巻き込まれ、自己批判か労働改造かという選択を迫まられていた。「この批判に参加した者に、郭沫若、周揚…などのような名人

がおり、批判は二年あまり続いた。…批判は胡適の一生と胡適を初めとするブルジョア階級の唯心主義を全面的に清算し、中国の思想史上重要な意義を占めている」と『毛沢東思想発展史』は以上のように俞平伯・胡適批判運動を評価している。⁽⁹⁾

俞平伯と胡適の「『紅学』の批判とほぼ同時に始まった批判は、もう一人の知識分子、胡風（1902—1985年）に対する批判である。胡風は、1933年7月から上海で作家同盟の宣伝部長や書記などを歴任し、文学理論家として中国の文壇で活躍していた。文芸界で胡風の文芸思想を批判しようと提案する論文が、1952年『文芸報通訳員内部通報』15—16合併号に、また『文藝報』66号に載せられた。9月から北京で「胡風文芸思想討論会」が開かれ、会議は4回にわたり、12月いっぱいまで引き続き、胡風批判が行われた。翌年の1月29日に、全国文芸同盟がまた胡風の文芸思想を討論するという名目で会議を催し、胡風の出席を許さずに、さらに踏み込んだ胡風批判をした。1954年7月22日、胡風は「意見書」⁽¹⁰⁾を書き、中央の指導者に頼んで毛沢東に送った。1955年1月、中共中央宣伝部は、胡風の意見書は彼の共産党に反対する思想を顕しているとし、それを徹底的に批判しなければならないという結論を下した。胡風は1月11日に「私の自己批判」という謝罪文を書き、また毛沢東に送った。毛沢東は胡風の謝罪文に次のように書き込んだ。

「胡風のようなブルジョア階級の唯心論者、人民と共産党に反対する思想の持ち主を徹底的に批判しなければならない。『プチブルの観点』⁽¹¹⁾という逃げ口上で彼を逃がしてはいけない。」

そこで、胡風とその同調者は、「反共産党秘密団体」と決めつけられ、人民日報に胡風の謝罪文と私信などが掲載された。1955年5月から6月の間、『人民日報』に載せられた胡風批判の論文は200篇もあり、胡風と彼と関係のある知識分子たちは、「陰謀家」、「灰色の蛇」、「もっとも陰險な敵対階級」⁽¹²⁾というレッテルを貼られた。6月10日付けの『人民日報』社説は次のように結論している。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

「身を隠しているすべての反革命分子を摘発すべきであり、摘発された反革命分子を断じて区別し適切に処理すべきである。これはすべての革命戦士の任務であり、すべての愛国者が注意すべき大事件である。」

そこで、「胡風分子」として捜査の対象とされた人は二千人に及び、「胡風秘密団体の一員」と名付けられた知識分子は、首にされたり、強制労働をさせられたり、監獄に入れられたりしたばかりではなく、胡風本人も、当然のことながら、監獄に投じられ、1979年1月15日に釈放されるまで、実に24年近くのほとんどを獄中で過ごした。⁽¹³⁾ 胡風批判は、結局のところ、私信に書かれた不満や悪口以外になんらの具体的な証拠もなく、胡風または彼と関係のある知識分子を「胡風秘密団体」と決めつけたことは、毛沢東一人に無限定に知的断罪権を与えることにつながり、中国共産党による「文字の獄」がここに始まった。

胡風批判や胡風批判以外に、小説家丁玲、学者梁漱溟批判の運動も背後で毛沢東に操られていた。また、その一連の批判は、後の中国全土に行き渡った反右派闘争に直接繋がったのである。

1956年4月、ソ連生産党20回大会で、フルシチョフ書記長がスターリン批判を行ったその年の秋に、ソ連がハンガリーに出兵し、ハンガリー民衆運動を鎮圧した。毛沢東は、ソ連の出兵ではなく、ハンガリーの民衆運動に驚いた。なぜ共産党の政権のもとで、人民大衆はあれほど共産党政権に反発したのであろうか。その原因を、毛沢東は、ブルジョア階級の知識分子、いわゆる「ペトフィ・サークル」⁽¹⁴⁾の影響と共産党内部の問題に帰した。そこで、イデオロギーに対するコントロールと「整党」（党内の思想・作風・組織の整頓）が毛沢東の社会主義建設の計画に取り入れられた。

1956年5月、中央宣伝部長の陸定一が、学術研究や文芸芸術活動において自由に意見を言っても、その人を咎めないという「百花斉放・百家争鳴」⁽¹⁵⁾を提唱した。この提唱の背景には、これまでの胡風事件などのよ

うな思想批判運動で萎縮させた知識分子を元気づけ、下火になった学術研究や文学活動において創造性を発揮させようとする毛沢東の意図があった。それに、知識分子は経済建設に不可欠であった⁽¹⁶⁾。毛沢東は次のように述べている。

「ブルジョアジーや、知識分子に対する問題の処理が適切でなければ、革命の事業にとって不利である。ブルジョアジーに対するやり方は、中国はソ連とは異なっている。中国のブルジョアジーと知識分子は、人数は少ないけれども、しかし、彼らには近代文化があり、われわれはいまはまだ彼らと連帯しなければならない。…労働者にもそれなりの文化があり、彼らは技術を持っているが、やはりエンジニアにはなれず、ブルジョアジーや知識分子に比較すれば劣っている。農民には文化がないとはいえない。農耕を立派にやること、民謡を歌うこと、踊ることも文化である。しかし、彼らの大多数は文字を知らず、近代的な文化・技術がなく、鋤などを使うことはできるがトラクターは使えない。

ブルジョアジーは近代文化や近代技術の面において、その他の階級より優れているので、彼らと連帯し、彼らを改造しなければならない。ブルジョアジーの持つ文化は、あるものは古くて役に立たないが、しかし多くのものは役に立つ。⁽¹⁷⁾」

知識分子を活気づけるのと併せて、中国共産党第八期第二次全会で、毛沢東は、来年から整風運動を行うことを決めた。整風というのは、第一に主観主義を整理すること、第二にセクト主義を整理することと、第三に官僚主義を整理することであり、共産党内部の問題を解決するには、武力ではなく批判と自己批判の方法を取らなければならないと毛沢東は提案した⁽¹⁸⁾。「武力ではなく」という言い方は、武力でハンガリー事件を解決したソ連に対する批判とも理解できる。1957年4月27日に、中共中央は全国に整風運動を行うことについて次のように指示している。

「ここ数年来我が党内では、大衆から遊離し、現実から遊離した

晩年の毛沢東思想と階級闘争

官僚主義、セクト主義、主観主義が新たに成長してきている。したがって党中央は『団結の願望から出発し、批判と自己批判を通じて、新たな基礎の上に新たな団結に到達する』という方針にしたがい、全党で改めて反官僚主義、反セクト主義、反主観主義の全面的で深い整風運動を行い、全党のマルクス主義の思想水準を高め、作風を改善し、それによって社会主義的改造と社会主義建設の需要に適應する必要があると考えた。…非党員が整風運動に参加を希望するときは歓迎すべきである。しかし、完全に自発的意志からでたものでなければならず、強制してはならないばかりでなく、隨時自由に退出することを許さなければならない。⁽¹⁹⁾」

この二ヶ月前の2月27日に、毛沢東は「關於正確处理人民内部的矛盾」と題する前述の講話を行い、知識分子に率直な意見を求めるような姿勢を取り、次のように述べている。

「百花斉放・百家争鳴、長期共存——これらのスローガンはどのように提起されたのだろうか。社会の多種多様な矛盾の存在を認めることからである。芸術、文学においてはそれらの矛盾は百花斉放として現れる。この百花斉放の中には、次のようなものが含まれる。すなわち、多種多様な花である。…胡風はなぜ（捕らえられてしまったの）か。彼は秘密団体を組織した。あれはよくない。彼が秘密団体を作ったりさえしなかったら、あのちっぽけな花が咲いたとしても、わが中国はとても広く九百万平方キロもあるのだから、そんなちっぽけな花が咲いても、なんでもないことだ。⁽²⁰⁾」

そして、1957年5月4日、中共中央は、党外人士に共産党の政府支援を依頼することについての指示を出し、人民内部における矛盾の分析や、中国共産党が犯した誤りや欠点についての批判が、党と人民政府の誤りを改め威信を高めるのに極めて有益であるとしている。⁽²¹⁾

なぜ、毛沢東が共産党内部で整風運動をする決心をしたのかについて、1957年4月28日付けの『人民日報』の社説は、次のように説明している。

「人民内部の矛盾は我が国の歴史の舞台で敵味方の矛盾にかわって主要な地位を占めるようになってきている。…全国で民主主義的生活の範囲を拡大し、批判と自己批判の方法を広げ、指導者と大衆の間の矛盾を発見しやすくし、それを解決しやすくしなければならない。全国人民に社会主義社会の中で十分な自由、平等と主人公としての意識を感じさせなければならない。このようにすれば、人民大衆はさらに容易に旧い社会の影響から抜けだし、さらに積極的に社会主義経済と文化の建設に参加するようになるであろう。」

社説は、遠回しに、ハンガリー事件が勃発してから毛沢東が憂慮したことを表している。つまり、中国共産党と中国人民大衆との関係をいかに正しく処理するかである。これは社会主義建設の理論と実践に関する極めて重大な問題であるともいえよう。人民大衆は、毛沢東が新民主主義革命を行ったとき依拠してきた根本であった。だから、政権党として人民大衆との関係をうまくやっていけなければ、その政権党は人民大衆を率いて社会主義革命を遂行する党として存在する理由がなくなる。共産党の幹部たちが労働者階級のパイオニアでありながら、人民大衆に奉仕する「公僕」でもあるとされている。主人である人民大衆との関係をうまくやっていくには、人民大衆の監督が必要である。毛沢東は、その「監督」の方法を模索し始めた。

毛沢東の考えた方法は、「百家争鳴・百花斉放」である。中国の古典に精通していた毛沢東は、下からの意見を汲み取る方法を考えたとき、すぐさまに二千年前の春秋戦国の時代の「諸子百家」が「争鳴」する歴史を連想したのである。言うまでもなく、先秦時代の「諸子百家」は、毛沢東の考える人民大衆の範疇に入らない知識分子ばかりであった。しかし、時代の変動にもっとも敏感に反応する知識分子の意見は、場合によっては、人民大衆の意見の集約でもありと考えられる。「知識分子の参加がなければ、革命の勝利は不可能である」と毛沢東は考えている。

「民族的圧迫と封建的圧迫を一掃し、新民主主義的な孤立・自由・民主

晩年の毛沢東思想と階級闘争

・統一と富強の中国を建設するためには、大量の人民の教育家・教師・人民の科学者・技師・技手・医者・新聞関係者・著述家・文学者・芸術家、及び一般的な作家が『人民に奉仕する』、『人民と一つになる』精神で困難な仕事に携わることが必要である。これらすべての知識分子は人民のために奉仕する点で業績をあげさえすれば政府と社会の尊敬を受け、国家と社会の貴重な財産と見なされるべきである」と毛沢東は知識分子について、上のように述べたことがある。⁽²⁴⁾そこで、知識分子嫌いの毛沢東は、知識分子に対して柔軟な態度を示し始めたばかりでなく、反対意見をも聞くような姿勢を取っていた。「人々を誤謬、醜悪、敵対するものから隔絶させること、唯心主義、形而上のものと隔絶させること…人々をこのようなものから隔絶させる政策は危険な政策だ⁽²⁵⁾」と毛沢東は言っている。彼は、「關於正確處理人民内部矛盾的問題」という論文の中で、知識分子の積極性を促進し、その才能を發揮させ、党内の知識分子不信の風潮を克服しなければならないと発言し、次のように述べている。⁽²⁶⁾

「社会主義事業に奉仕することを心から願う知識分子は、信頼してやらなければならない、根本的に彼らとの関係を改善し、彼らの解決すべきあらゆる問題を解決してやり、彼らに積極的に自分の才能を發揮させなければならない。…社会主義を樹立するために、労働者階級が自分の技術幹部の隊列をもたなければならない、自分の教授、教員、科学者、新聞記者、文学者、芸術家とマルクス主義理論家の隊列をもたなければならない。これは非常に大きい隊列で、人数が少なくてはいけ⁽²⁷⁾ない。」

以上のような見解に基づき、毛沢東は「党外人士」の知識分子にまで共産党の整風支援を依頼するようになった。1957年5月4日は中国知識分子にとって祝日であった。というのは、この日に、中共中央は「關於繼續組織党外人士对党政所犯錯点開展批評的指示」（「党外人士に共産党の整風支援を依頼することについての指示」）を公布したのである。中国の知識分子は、政権党から次のように反対意見を求められたからである。

これは、中国皇帝の王朝が崩壊して以来、始めてのことである。

「人民内部矛盾の分析、党が犯した誤りや欠点についての批判、これらは、党と人民政府とが誤りを改め威信を高めるのに極めて有益である。引き続き繰り広げ批判を深めるべきで、止めたり中断してはならない。…我が党の欠点や誤りを引き続き批判してもらい、我が党の整風を助けてもらう、そうでないと我が党の整風に役に立たない、…我が党の整風が成功すれば、党は完全に主導的な地位を獲得できるし、その時には社会各界で整風を展開できる（先ず知識界⁽²⁸⁾である。）」

「党外人士」に意見を求めるために、中共中央統戦部（中共中央統一戦線部）は5月8日から6月3日まで党外の知識分子を招集し、13回にわたる座談会を開いた。また、統戦部は当時の国务院の事務所の一つである「八辦」と5月15日から6月8日まで各商工業界の代表を集めて25回にわたる座談会を開いた。座談会での発言は翌日の『光明日報』に掲載された。また、上海、天津など中国の九大都市で知識分子を招集し、知識分子たちの批判をそのまま『光明日報』に載せたのである。知識分子の批判のなかで、典型的なものは、章伯鈞民主同盟副主席の中国共産党への意見書と儲安平『光明日報』編集長の「党の天下」の批判などである。章伯鈞は、1957年5月21日に、「共産党の指導は不可欠で」と強調しながら、「この制度にはセクト主義、教条主義、官僚主義を生み出す欠点があるとも感じている」といい、「反革命鎮圧、三反運動、反革命肅清などで残された問題をもう一度討論し、党と政府は意を決して調査すべきである」と主張している⁽²⁹⁾。その一方、儲安平は、6月1日に、「解放以後、知識分子はいずれも熱烈に党を支持し、党の指導を受け入れた」と認めたが、「『党の天下』という思想問題」を提起し、「ここ数年来、多くの党員の才能と、その担当する職務が極めて不相応である。仕事もちゃんとできずに、国家に損害を与えるばかりか、人を心服させることができず、党と大衆との間の緊張を激化させているが、その

晩年の毛沢東思想と階級闘争

謝りはこれらの黨員にあるのではなく、党がなぜ不適当な黨員をいろいろなポストにつけているかということにある。党のこういったやり方は『王土にあらざるところなし』という考え方であり、ここから現在の党の天下一色に塗りつぶされたこのような状況が生れたのではなからうかと、以上のように意見を共産党に出している。⁽³⁰⁾

「百家争鳴・百花斉放」政策は、前掲書『毛沢東思想発展史』で次のように讃えられている。

「『百家争鳴・百花斉放』は、新中国の文芸と科学を指導する基本方針である。これは…毛沢東とその他の人たちの一大創造であり、マルクス主義を発展させたものであり、科学と文化の発展に重要な意義をもっているものでもある。…それは、文化専制主義を終わらせ…社会主義建設の全面発展を促進するのに極めて有益である。⁽³¹⁾」

毛沢東の提起した『百家争鳴・百花斉放』は、どのように「文化専制主義」を終わらせたのであろうか。それは6月8日付けの『人民日報』に掲載された「これはどういうことか」という社説に如実に表されている。社説は、毛沢東の意を体し、次のように述べている。

「『共産党の整風を助ける』という口実のもとに、少数の右派分子が、共産党と労働者階級の指導権に対し挑戦しており、公然と共産党に『下野せよ』とわめいてきえている。彼らは、この機会に、共産党と労働者階級を覆し、社会主義の偉大な事業を覆し、歴史を後退させて、ブルジョアジーの独裁に戻し、実際には革命の勝利の前の半植民地の状態に中国を引き戻し、中国人民をもう一度帝国主義やその手先の反動的統治のもとにおこうと企図している。…このような脅迫や罵言は、われわれに、我が国で階級闘争がまだ続いており、階級闘争という観点からいろいろな現象を観察し、正しい結論を出さなければならないのだと言うことを気づかせるだけである。」

実際に、5月15日に、毛沢東はすでに「事態は変化しつつある」というテーマで、いままでの態度とまったく反対である次のような発言をし

た。

「最近、民主党派と大学の中では、右派の態度がもっとも断固としており、もっとも間違いじみている…われわれは、ピークに達するまで、なおしばらく彼らをたけり狂わせておく必要がある。彼らが間違いじみてくればくるほど、われわれにとってますます有利である。…毒々しい、反動的な大量の言論を、なぜ新聞に載せることを許したのか。それは、これらの毒草や毒気を人民によく見分けさせて、それを刈り取りやすく、一掃しやすいようにするためである。

『君たちはなぜ早くこのことを話してくれなかったのか』というが、なぜ早く話さなかったのかというが、われわれは、すべての毒草は刈り取らなければならないと、とっくに言っておいたではないか。⁽³²⁾」

以上のような発言は、5月4日に知識分子に反対意見を求める上述の「党外人士に共産党の整風支援を依頼することについての指示」からわずか11日も経たずになされた。そして、6月10日に、中共中央は正式に反右派闘争の段取りと戦術問題について指示を出し、「民主党派にも大学教授にも大学生にも、右派、反動分子がいるが、今回の運動でもっとも騒いでいるのは彼らである。彼らの経歴は複雑で、裏切り者もいれば、三反運動、反革命肅清運動で整理された者もあり、地主・富農・資本家の子弟もいるし、家族や親類が鎮圧された者もある。…われわれの任務は、彼らを暴露し孤立させることである」と、知識分子打倒を明白に宣言している。⁽³³⁾知識分子打倒を主な任務とする反右派闘争というキャンペーンは、知識分子に「陰謀である」と反発されたことに対して、毛沢東は、「陰謀」ではなく「陽謀」であると反論した。「これは陰謀だと言う人がいる。しかし、われわれは、これが『陽謀』だという。なぜなら、われわれは事前に次のように敵に知らせていたのである：『妖怪変化が隠れる場所から現れればせん滅しやすいのだ、毒草が土から芽生えれば除去しやすいのだ』」と、毛沢東は言っている。⁽³⁴⁾しかし、毛沢東の策略は、恐らく陰謀でもなく「陽謀」でもなかった。大いに意見を述べ、大いに

晩年の毛沢東思想と階級闘争

議論し合おうという「大鳴大放」運動を呼びかけたとき、毛沢東は、自分の政権の安定性と自分の威信の大きさに自信満々であった。ソ連に強い対抗意識を持っている毛沢東は、自分の指導のもとでの中国では、ソ連と違って、たとえ共産党が党や政府に対する批判を呼びかけても、党と政府が批判によって改善され、ますます強固なものになり、また人民大衆も適当なはけ口を与えられ、意見を上に伝えることができ、ソ連のような資本主義的自由化とハンガリー事件のような動乱はないであろうと高を括っていたのであろう。しかし、「大鳴大放」のゲートを開くと、意外にも主に知識分子から共産党の政策に対する不平不満が雪崩のように起こり、瞬間に全国に広がった。長い革命戦争をとおして巧みな戦略と手腕を磨いてきた毛沢東は、すぐに自分の失敗に気づき、失敗をまたチャンスに切り換え、共産党に不満を持つ「反対勢力」を一掃しようと乗り出したのである。解放後共産党の指導のもとでたった8年しか暮らしてこなかった当時の中国の知識分子たちには、毛沢東の英知と偉大さがそこまで理解できなかつたであろう。1957年6月8日付けの『人民日報』に、毛沢東は匿名で社説を書き、次のように彼の失望と憤慨をぶちまけている。

「共産党は過ちを犯しましたし、欠点もある。共産党の整風運動は、まさにこの過ちや欠点を払い落とそうとするものである。…このようなとき、社会主義的民主主義を擁護し、共産党の指導権を守る言論を指して、『このうえない恥知らず』だとか、『虎の悪事を助ける』などと言って、共産党の人を恐ろしい人食い『虎』にたとえている。…各民主党派と高級知識分子の中には、少数の右派分子の中には、廬郁文が指摘したように、辱め罵ったり、威嚇したり、『「公正」らしき態度で』人々の言論を抑圧したり、ないしは脅迫状を書く手段で目的を達しようとした者もいる。これらのすべてはあまりにもやり過ぎではなからうか。」

7月1日に、毛沢東はまた『人民日報』の社説の形で、『文匯報』的

資産階級方向應該批判」(『文匯報』のブルジョア階級的偏向を批判すべきである)という論文を書き、章伯鈞、羅隆基を「章羅同盟」と名指して批判した。7月に、中共中央は青島會議を開き、毛沢東は、「1957年夏季の形態」(「1957年の夏の形勢」)という論文を提出し、我が国の社会主義革命の時期には、反共、反人民、反社会主義のブルジョア右派と人民との矛盾は敵味方の間の矛盾であり、食うか食われるかの和解できない敵対性の矛盾であると右派の性質を決めつけ、また数カ月のうちに右派分子を暴き出そうと呼びかけた⁽³⁵⁾。

このようにして、右派に反対する条件が少しずつ整っていき、共産党員たちは活躍し始めた。6月8日付けの『人民日報』が、ある鉄鋼工場の労働者たちが右派を憤って批判したことを報道した後、連日各大都市の労働者階級は集會を開き、右派分子を糾弾していた。6月11日に『人民日報』はまた、「全国人民在社会主義基礎上團結起来」(「全国人民が社会主義の基礎の上に團結しよう」という社説を出し、右派を見分けるポイントとして、社会主義を擁護するかどうか、人民民主独裁を擁護するかどうか、共産党の指導を擁護するかどうか、という三つの標準を提出した。同じ日に新聞『工人日報』は、「没有共産党，就没有新中国」(共産党がなければ、新中国はない)という社説を出した。新聞『中国青年報』は、6月11日から14日までの5日間に5つの社説を出し、右派分子に重い打撃を与えようと共産党の予備軍の青年团团員に呼びかけた。そして、8月1日に、中共中央は青島會議での毛沢東の指示にしたがい、「關於繼續深入反对右派分子的指示」(「引き続き暴き出して右派分子に反对しようという指示」)を公布し、反右派闘争は、中央、省、市、県のレベルで展開されなければならないと決定した。

右派分子の性質についての見分ける方法も、反右派闘争の展開にしたがってレベルアップしていく。最初は右派の言論は人民内部の矛盾の反映であり、右派も人民の一部であると見做された。しかし、6月26日には、右派は人民内部の矛盾であるが、一部は人民内部の矛盾の範囲を超

晩年の毛沢東思想と階級闘争

えていると判断された。7月1日になると右派分子は反動派、反革命として扱われるようになった。1958年5月5日、劉少奇は毛沢東を代表して中国共産党第八期代表大会第二次会議の席上で、右派分子と地主、買弁ブルジョア階級またはその他の「反動派」とを並べ、「地・富・反・壊・右」（地主・富農・反革命・悪人・右派）という概念を定着させた。

反右派闘争はここまでは止まらなかった。1957年7月28日付けの『人民日報』は、「反右派闘争是对每個党員的重大考驗」（「反右派闘争はすべての党員にとって重大な試練である」）という重要な社説を載せ、中国共産党内にも右派があり、共産党内の右派は、長い間党外の右派と一つ穴の貉であるとした。この社説で一つ重要な信号を発している。つまり、共産党内でも反右派闘争が開始されたという信号である。

二ヶ月の後の9月11日に、「嚴肅对待党内的右派分子」（「党内の右派分子に厳しく対応せよ」）という社説が『人民日報』に載せられた。この社説が誰によって書かれたか定かではないが、たとえ毛沢東ではないとしても、少なくとも毛沢東の指示を受け、毛沢東の検閲を通り彼の意志を如実に反映したものであるに違いない。というのは、『人民日報』は、「共産党の喉と舌」とされてきており、『人民日報』の社説のほとんどは共産党の最高指導者の思想の表れである。それに、毛沢東時代の中国では、「党中央のすべての決議は…毛沢東同志が最終的に許可しなければダメになる」という状況におかれている⁽³⁶⁾。9月11日の社説は、反右派闘争の重心が、共産党内の隠れている右派分子を如何にして処理するかというところに転換したとし、次のように党内の右派分子の危険性を強調している。

「党内と党外の右派分子は、その性質から言えば違うところがなく、皆人民に反対し社会主義に反対するものである。…党内に右派分子が蔓延すれば、我が党と革命事業にとっては非常に危険である…もし我が党に右派分子の存在を許してやれば、彼らはきっと党外の右派分子と助け合ってぐるになり、内部からわれわれに打撃を与

えようと、内部からわれわれに反対しようとする。」

この社説は、また非常に厳しい口吻で党内の右派分子に寛大で曖昧な態度を取る同志を批判し、共産党の老幹部が右派になることをなおさら許せないことであると威嚇した。明らかに党内での反右派闘争は、党外のそれよりずっとやりにくかったであろう。なぜかと言えば、一つは、右派的言論があると見做された共産党員の多くは、比較的高い地位を占める古参幹部であったことである。もう一つは、党内の反右派闘争が中国共産党歴史にあるさまざまな出来事に対する評価と繋がっていたからである。それでも、たとえば浙江省共産党委員会の常務委員の沙文漢や河南省共産党委員会第一書記の潘復生、青海省共産党委員会書記処書記の孫作賓などのような古参幹部は、最後にやはり右派分子として吊し上げられた。

1957年の初夏から1958年晩春まで、反右派闘争は大きな業績をあげた。共産党内部と外部で、おびただしい数の右派分子が摘発され、批判され、強制労働隊や監獄に送り込まれた。この運動は全国に波及し、それに、右派と断定する公式は非常にあやふやで、ちょっとでも違った意見を口にする者も右派分子にされるので、いったいどれほどの規模の業績をあげたのか、言い換えれば、どれほどの人数を右派として摘発したのか、当時の共産党指導部にも把握できなかったようである。⁽³⁷⁾1958年4月の漢口会議で、毛沢東は、全国に右派は30万人いると言った。翌年の9月、「中共中央關於摘掉確實改悔的右派分子的帽子的指示」（「確實に後悔し改めた右派分子のレッテルを外す中共中央の指示」）は、右派分子の数を、45万人とした。いままで公式に発表された「右派分子」と断定された人数は、55万人であり、叢進の『曲折発展的歲月』（『曲折に発展した歲月』）という本によると、1959年夏に廬山会議の開催中に、私信で毛沢東に意見を述べたために、「左傾反党グループ」として批判された彭徳懐国防相らと後にほぼ一年ほど続いた反右傾キャンペーンで批判された右傾分子を加えれば、その数はなんと365万人にのぼる。⁽³⁸⁾1980年5月

晩年の毛沢東思想と階級闘争

から、鄧小平は、右派分子をもう一度審査し、96人以外の右派分子は全部「無実だ」と判定し、名誉回復した。それでも1981年6月27日に公布された中共中央の「關於建国以来党的若干歷史的問題的決議」（「建国以来の党の若干の歷史的問題に関する決議」）では、反右派闘争を回顧するにあたって、次のように述べている。

「この整風の過程で、ごく少数のブルジョア右派分子がこの機を逃さじとばかりに『大鳴、大放』なるものを鼓吹し、党と新生の社会主義制度を欲しいままに攻撃し、共産党の指導にとって代わりうとしたが、こうした攻撃に断固反撃を加えたことはまったく正しかったし、必要なことであった。だが、反右派闘争はひどく拡大され、多数の知識分子、愛国人士や党内の幹部を間違っ(39)て『右派分子』と決めつけ、悲しむべき結果をもたらすことになった。」

反右派闘争の統計表（1979年末現在）

| | 57/58年に右派とされた者 | 再審査で誤認とされた者 | 誤認率 |
|--------|----------------|-------------|-------|
| 全 国 | 552,877 | 533,222 | 97.0% |
| 中央国家機関 | 6,284 | 6,203 | 97.4% |
| 民主党派 | 27 | 22 | 81.5% |

出典（馬宇平など『中国 昨天与意今天 1940-1987 国情手冊』，p.751）

上記は、やや多い紙幅を費やして、反右派闘争までの経緯を羅列したが、それをただ単に歴史の記述として理解してはいけない。というのは、以上のような史実を顧みると、毛沢東が如何にして知識分子に対する僅かな信頼さえもなくしたのかがある程度理解できるからである。反右派闘争の後、知識分子は毛沢東にとって、社会主義の建設に使わなければならない者でありながら、ありとあらゆる手段で抑制したり否定したり矮小化させたりしなければならぬ存在になったのである。毛沢東の考えによれば、大学、中学校、小学校の教授や教員の90%以上は国民党時代

の人たちで、共産党とは心が異なっているものが多い。「ブルジョア知識分子は、猫の目のようにぐるぐると変わっていく」という毛沢東の話は、知識分子に対する彼の不信感をリアルに表している。⁽⁴⁰⁾

1964年10月、毛沢東は外国からの賓客を接待するときに、ブルジョア階級が文化、芸術、教育と学術領域を掌握しており、頑なに共産党と対抗していると述べ、1966年にはまた、現在の学術界と教育界ではブルジョア知識分子が実権を握っており、共産党と社会主義に反対していると述べている。⁽⁴¹⁾ 文芸界と教育界は、ブルジョア知識分子の天下で、修正主義の崖っぷちに立っていると言う判断から、毛沢東は、「五・七指示」のなかで、「教育革命を行わなければならない、ブルジョア知識分子がわれわれの学校を支配するという現象をこれ以上継続させてはならない」と述べ、青年と学生の造反を期待している。全国人民に解放軍に学べと呼びかけ、軍隊に絶大の信頼を与えた毛沢東は、軍事学校だけは信頼しない。1956年外国からの来客との会談で、毛沢東は、軍事学校に関して、現在の軍事学校は混乱しており、整理しなければならないとか、軍事学校のない時代がよかった、われわれの軍隊の90%以上は、文字も読めない、あるいは小学校程度のものであるとか、国民党は軍事学校を作ったが、文字も読めない兵士たちに負けたのではないかとこのような見解を示している。⁽⁴²⁾ この見解に基づき、毛沢東は、「本を多く読めば読むほど馬鹿になる」⁽⁴³⁾と結論したのである。これは、解放前、同じ毛沢東が言った「新民主主義社会を建設することは、文盲ばかりの国ではまったく不可能なことである」⁽⁴⁴⁾という話と比べると、まさに雲泥の差であろう。

反右派闘争の時代から息が引き取るまでの知識分子に関する毛沢東の発言を要約してみると、知識分子に対する毛沢東の認識は主に次のような三つのものである。

I. 中国の知識分子はほとんど「ブルジョア学術権威者」、言い換えれば、ブルジョア学術大ボスである。

II. 「ブルジョア知識分子」は文化部門におけるイデオロギーの領域を

占領している。これは、重大な階級闘争である。

III. これらの知識分子から修正主義が生まれる。

以上のようなレベルで知識分子を判断すれば、文化部門を突破口として、プロレタリア文化大革命を発動せざるを得なかったわけも理解できないものでもないであろう。

晩年の毛沢東の社会主義の実践を通覧すれば、毛沢東が知識観の問題に関して、認識論、方法論と知識分子という三つの方面で迷路に入り込んだことが分かる。先ず認識論に関して、毛沢東は、実践から認識を得るという命題を極端に単純化し、認識が形成される過程の中での知識分子の作用と価値を否定している。認識は人間の実践の中での客観的な世界に対する反映であると毛沢東は認めている。この意味から言えば認識は主に実践から来ているといえよう。人間のあらゆる活動の中で、もっとも基本的な実践活動は生産活動であり、そこで物質を生産する主体は生産活動に携わる人間だと考えなければならないが、毛沢東は物質を生産する主体を労働者、農民に限定して知識分子の働きを除外している。それに、理論と実践を結合する重要性を語る時、毛沢東はいつも、高度なレベルの実践活動の一つ——科学活動の主体が知識分子であることを忘れているようである。あるいは、毛沢東にとっては、科学活動としての実践は実践ではなく、科学活動に携わる知識分子も当然実践者ではなくなるのかも知れない。毛沢東の理論の中で、実践活動を行う基本は、知識分子以外の労働者、農民であるから、知識分子はあくまでも補足的な存在で、労働者、農民という「皮」に依存する「毛」であり、労働者、農民に学ばなければならない存在である。毛沢東は次のように知識分子を扱き下ろしている。

「俳優、詩人、芸術家、作家を都会から追いだし、すべて田舎へ追い払おう。時期をわけ、組を分け、農村、工場に下放しよう。いつも事務室に居座っているものはものが書けない、下へ行かなければ飯を食わせない。行けば食わす。」⁽⁴⁵⁾

「現在、知識分子はどのような皮に付着しているのでしょうか。公有制の皮に付着している、プロレタリアの体に付着している。だれが知識分子に食事を食べさせているのでしょうか。答えは労働者、農民である。知識分子は、労働者階級、つまり労働者が、お願いして彼らの子弟に教えてもらう先生ではある。しかし、主人の言うことを聞かずに、相も変わらぬ決まり文句を教え、八股文を教え、孔夫子を教え、あるいは資本主義の決まり文句を教え、反革命を育てるなら、労働者階級は（知識分子を雇うことを）止めるに決まっている。君をお断りし、来年は招聘状を出さない。」⁽⁴⁶⁾

この話の中で毛沢東は知識分子と労働者、農民との関係を主人と家庭教師との関係としてとらえ、労働者、農民が知識分子を養うと見る。あたかも知識分子を生産せず、価値も創出しない階層でもあるかのように扱うのである。まして皮に付着する「毛」の存在である知識分子が人類の歴史の中でもっとも効率よく、もっとも貴重な価値を生産しているとは毛沢東は考えたくなかったのであろうか、あるいはわざと無視したのであろうか。というのは、確かに認識は主に実践によって得られるが、実践から直接来た認識はただの経験に過ぎない。経験から理論までの科学的な加工、昇華、いわゆる精神活動と精神生産が必要である。その精神生産が物質生産にフィードバックしたからこそ、近代工業を成り立たせ、人類の歴史を飛躍的に書き換えさせたのである。だから、物質生産と精神生産とは人間の生産活動の二つの側面に過ぎない。近代的工業構造がまだ成立していなかった中国の場合、労働者、農民は主に物質生産に携わっているのに対し、知識分子は主に精神生産に携わっていたのであるが、近代工業の発展したがい、物質生産と精神生産とは互いに融合し、その境目がだんだん分からなくなっていく。言い換えれば、物質生産と精神生産とは、同じ生産活動の中での分業に過ぎないのである。しかし、毛沢東にとって、労働者、農民と知識分子とは互いに外在的な二元的存在であり、労働者、農民の物質生産の実践活動における作用が決定的で、

晩年の毛沢東思想と階級闘争

認知過程で非常に重要な部分を担っている知識分子の作用は二の次で補足的なものに過ぎないのである。

知識分子の階級属性を判定する方法論についても、毛沢東は形而上的手法を取っている。彼は、知識分子の出身家庭と彼らが教育を受けた時代の社会環境を基準に知識分子の階級属性を判断する。ここで説明しなければならないのは、毛沢東は知識の重要性をまったく否定したわけではない。プロレタリア文化大革命の中でも毛沢東は、「労働者の中から技術者を育てなければならない、…実践の経験がある労働者や農民の中から大学生を選抜しなければならない」と主張している⁽⁴⁷⁾。しかし、毛沢東は、プロレタリア知識分子（むろん毛沢東は、「ブルジョア知識分子」という用語を多く使っているが、「プロレタリア知識分子」という用語を使ったことはない）とブルジョア知識分子とを見分ける基準として、上に述べたように、知識分子の出身家庭、及び知識分子が教育を受けた時代の社会環境、つまり「新社会」か「旧社会」をあげている⁽⁴⁸⁾。毛沢東は、自分の理論の正しさを証明するために、古典に対する彼の豊かな知識を駆使して、古代に名を残した知識分子は、如何に出身が貧しいか、如何に教育を受けていないかを次のように誇張する。

「あんなにたくさんの書物を読む必要はまったくない。華佗（三国時代の医者）は何年生の学校で学んだのか。明代の李時珍（明代16世紀に生きた薬学者で医学者、「本草綱目」の著者）は何年生の学校で学んだのか。医学教育は、高級中学の卒業生や初級中学の卒業生などを吸収するには及ばない。高級小学の卒業生が三年も学べば十分である。…長く勉強すればするほど、馬鹿になる。」⁽⁴⁹⁾

「歴代の状元（科学の最終試験の第一位の合格者たち）にろくな者はいない。唐朝の有名な詩人李白や杜甫は進士（科学の殿武の合格者）ではなかったし、また翰林（進士試験で庶吉士の学位を得た人の称号）でもなかった。韓愈や柳宗元もやはり二級進士に過ぎなかった。王実甫、関漢卿、羅貫中、浦松齡、曹雪芹もみな進士でも

翰林でもなかった。浦松齡は抜擢された秀才（科挙受験合格で学校に入った人）であった。たとえ一級引き上げても、また挙人（郷試に合格した人）にはなれなかったのだ。一般に、進士や翰林に選ばれた者は、いずれも、成功していない。明朝で、良い統治をしたのは太祖と成祖という二人の皇帝だけであり、一人（太祖）は文字を知らなかったし、もう一人（成祖）は少ししか知らなかった。その後、嘉靖帝になると知識分子が実権を握るようになったが、かえって、政治がうまくいかず、内乱を生じた。漢の武帝、李後主は文化的教養が高くて、かえって、国を滅ぼした。読書が多すぎると、人を損なうことが分かる。劉秀（後漢の光武帝）は大学士であったが、劉邦（漢の高祖）は田舎者だった。…明朝の李時珍は至るところを駆けめぐり、山に入って薬草を採集した。祖衝之（南北朝時代、紀元5世紀に、円周率を算出した数学者）も中学にも、大学にも通ったことはなかった。孔子様は貧農の出身であり、（子供の時に）羊飼いをしたが、やはり、中学にも、大学にも入ったことはなかった。」⁽⁵⁰⁾

以上のような見解に基づき、毛沢東は、一つの結論に達したのである。つまり、地主や資産家出身者や、解放前の学校教育を受けた知識分子は、ほとんどブルジョア知識分子である。それに、新中国の学術界と教育界は、ブルジョア知識分子によって制御されている。社会主義革命が深まれば深まるほど、ブルジョア知識分子の抵抗が激しくなり、共産党に対してますます反対の立場を取るようになる。⁽⁵¹⁾知識分子に関する毛沢東のこの種の発言を見れば、彼が血統論者であるように感ぜずにはいられない。彼の目から見れば、地主と資産家の出身の知識分子や旧社会と旧社会の教育を受けた知識分子のほとんどは、ブルジョア知識分子である。彼らは、社会主義のもとで20年ほどのマルクス・レーニン主義の教育を受けていても、ブルジョア寄りの性質が根本からは変わっていない。知識分子政策に関する共産党の業績を語るとき、毛沢東は、党の知識分子に対する団結、教育、改造の方針が正しく、建国後、知識分子を改造す

方面で大きな勝利を勝ち取ったと語ったにもかかわらず、文芸や学術、教育のみを論ずるとき、毛沢東はまた知識分子が十分には改造されておらず、相変わらずブルジョア寄りの者ばかりであると知識分子を厳しく追求している。このようにして、毛沢東は非論理的で自家撞着している矛盾をその死まで抱えていく。

知識分子に対する認識が歪んでいるので、毛沢東は自分の知識観をも歪ませている。彼は、知識を生産手段のような物質的な財産と同一視し、「私有知識」を批判し、封建主義・資本主義・修正主義のものと目される知識を一掃しようとする。当然のことに、そのような封建主義・資本主義・修正主義的な知識に毒されている知識分子は、知識という「私有財産」を持っている「精神貴族」として打倒されなければならない。「社会主義社会のホワイトカラーも危ない。というのは、彼は知識をより多く持っているからだ」と毛沢東は言っている。⁽⁵²⁾確かに知識の多寡によって人間に階層が生まれる可能性がある。しかし、知識そのものは、その本質から言えば、階級的な属性がなく、人類全体に所属する重要な財産である。シェクスピアの知識もそうであれば、ベイトーベン⁽⁵²⁾の知識もそうであり、アインシュタインの知識もそうである。また孔子や老子、魯迅ないし毛沢東の知識もそうである。マルクスがマルクスになれたのは、「封建主義、資本主義」の知識を大量に吸収したお陰であろう。また、「科学的社会主義」理論の創始者である当のマルクスやエンゲルスの知識も、決して社会主義者のみに属するものではあるまい。彼らの知識は、人類共有のもののみならず、人類がそれを受け入れ、ないしは行動に移してから、始めてその価値を実現することができるものである。言うまでもなく、教育や生活環境などの原因で、人の知識には量的な差がある。しかし、それは、生産手段私有制の意味での「私有」と性質が違ったもので、同じように考えてはいけないものである。特に、毛沢東の社会主義の時期において、知識は商品や私有財産として扱われるのではなく、知識を持っている人もその知識を「私有」している者になれ

ず、その人に知識が豊富であるとしか言えなかったのである。端的に言えば、知識は私有できない、私有されて他人の利用のできない知識は知識ではなくなる。他人との共有によって知識の価値が実現できるということは、知識の本来の性質である。しかし、1967年に中央教育部革聯によって編集された『毛主席論教育革命』で、毛沢東は、知識が私有できるものであり、知識分子は知識を独占して人民大衆に使わせないと考え、そのような状況を打破するために、文芸部門、衛生部門、新聞部門、科学部門、学術界、さらに教育界で革命を起こさなければならないと主張している。そのような革命は、「知識の私有」の状況を「共有」にさせるものではなく、知識分子に私有された知識を頭から消すものである。人民大衆に役に立たない私有知識はがらくたと同然で、むしろ徹底的に消したほうが社会主義のためになれるのであろう。さらに、ソ連が修正主義に移り変わる根源を分析するとき、毛沢東は、ソ連に「精神貴族」が存在しているという判断を根拠に、「私有知識」という概念を打ち出し、国内で「修正主義に反対し、修正主義を防止する」ために、「精神貴族」である知識分子を標的に「私有知識」を批判したり、または、知識分子と労働者、農民の脚色転換（いわゆる知識分子が労働者、農民になり、労働者、農民が教育機関などを占領すること）をさせたりした⁽⁵³⁾。その結果として、プロレタリア文化大革命の中で、中国全土で知識分子を「臭老九」（九番目の臭い旦那）と敵視し、知識を否定する風潮が氾濫した。「読書無用論」（読書は役に立たない論）が革命のスローガンになり、中華文明は大きく後退させられていったのである。

おわりに 伝統に呪縛された晩年の毛沢東思想⁽⁵⁴⁾

毛沢東思想を分析するとき、毛沢東の経験した時代や社会、国家などの背景を合わせて考える必要がある。というのは、毛沢東思想は、彼自身がすべてを独創をしたのではなく、その時代の社会構造、経済基盤、政治制度、民族文化などと密接な関係を持っているからである。このよ

晩年の毛沢東思想と階級闘争

うに見なければ、彼の一挙手一投足がなぜ8億の当時の中国人に、あれほどの巨大な影響を与えたかは理解できなくなる。この意味から言えば、毛沢東を中国の時代と民族の化身として、また、晩年の毛沢東思想を中国文化の一断面として考える必要がある。ただし、晩年の毛沢東思想は、民族の自我意識の側面を反映しているとは言うものの、毛沢東の観察、体験と理解を通したのもでもあり、それには毛沢東独自のものも多く含まれていた。意味論の角度から見れば、思想は、表面的な語意構造と潜在的なコード規則によって構成されている。前者はあまり意味のない語彙であるが、後者は深層的な内容を持っているものである。すでに分析したとおり、晩年の毛沢東思想の体系に見られる「人民大衆」や「資本主義の道を歩む実権派」、「ブルジョア階級」、「修正主義」、「ブルジョアの権利」などといった、多くの概念と範疇、用語や命題などは、独特の内容と意義を持ち、時代の色合いが濃く含まれており、字面どおりの解釈は住々にして、間違った結論に導いてしまう。だから、毛沢東思想を分析するとき、表面的な語彙構造よりも重要なのは、「潜在的なコード」をどう理解するかである。そこから考察していくと、毛沢東思想の動機と意識傾向を探ることができ、一見してさまざまな矛盾を含む毛沢東思想のなかに、一貫した理論の展開を見つけることができる。⁽⁵⁵⁾

晩年の毛沢東思想を分析するとき、分析者をもっとも困惑させるのは、毛沢東思想に在る多くの矛盾である。たとえば、毛沢東は、人民大衆は歴史の原動力で、主人であると力説しながら、個人崇拜の必要性をも語っている。⁽⁵⁶⁾毛沢東の著作には、「人民民主」という言葉がしばしば使用されている。しかし、一方で彼は、独断的で強制的な形で「人民民主」化の過程を推進していった。人民内部の矛盾を区別し正しく処理することが社会主義理論と実践の主なテーマであると主張する毛沢東は、一方で、人民から、ないしは共産党内部から出た反対意見との対立を生死をかける階級闘争と見なしている。法律に従わず権力のみを頼って、人命を虫けらのように取り扱うことに大きな憤慨を示した毛沢東は、法律を反古

にし、さまざまな政治運動を展開し、多くの人々の死を招いてしまった。社会主義的な人道主義の精神から生まれた平等と自由を追求する毛沢東は、中国の解放から彼の死に至るまで、一方で多くのファシズム的な現象を容認したり励ましたりしていた…。1981年6月27日に発布された「關於建国以来党的若干歴史問題的決議」（「建国以来の若干の歴史的問題に関する決議」）は、次のように毛沢東の矛盾を指摘している。

「毛沢東同志はわが党内やわが国家生活のなかに存在する欠点を克服しようとしたが、晩年に、多くの問題に対して正確な分析ができず、特に『文化大革命』期において、是と非、敵と味方とを混同していた。彼は、自分が重大な錯誤を犯したときにも、全党にマルクス、エンゲルス、レーニンの著作を学習するように要求し、終始自分の理論と実践とがマルクス主義的なもので、プロレタリア階級独裁を強化するために必須なものであると信じ込んでいた。ここに彼の悲劇があった。⁽⁵⁷⁾」

毛沢東が悲劇的な人物になるきっかけは、中国の独自の工業化も道をはかったときにあった。小農経済の歴史を何千年も続けた中国では、確かに毛沢東の言うとおりの、共産党のような革命の党がなければ、革命は成功できなかったであろう。それに、中国の場合、共産党の成功は、大衆の理性に覚醒によると言うよりは、むしろ、カリスマ的なリーダーないしはリーダーシップの形成によるところが大きい。長年の帝国主義列強の侵略と軍閥混戦で苦難を強いられていた中国の人民大衆は、自分を苦難から救い出す「名君」を期待していた。そこに、あたかも時代の要求に応じて作られたかのように、毛沢東が登場したのである。カリスマ的で魅惑的な個人の権威は、中国の場合、乱世あるいは歴史的な大変動の時代に生まれてきている。中華民族が生存の危機と精神的危機に瀕し、現存の政治的権威が合法性の基礎を失い、既存の価値観や信念体系や社会規範が人間関係を維持することができなくなるとき、また、いわゆる精神的、肉体的、経済的、倫理的、宗教的、政治的危機などに瀕すると

晩年の毛沢東思想と階級闘争

き、中華民族は、その文化に決定付けられているかのように、世を救う偉大な人物を期待するようになる。その人物は、まず未来を見通せ、未来の世界の理想図が描け、社会の価値観と信念体系を作り出せる人物でなければならない。さらに、彼は、領袖の気迫を持ち、自分の「人格の」力で、「散らばった砂」と言われる中華民族を引き付けて凝集させ、強固で規則正しい、宗教団体の性格を持つグループを作り上げ、全民族を引き連れて悪運から脱出し、明るい将来に向かわせる人物でなければならない。要するに、彼は中華民族の将来と理想を体現し、中華民族に呼びかけ、彼らを団結させ、その将来と理想のために奮闘し献身できる人物でなければならない。半植民地、半封建の状況にあった中国は、外来文化の侵入によって民族文化の危機に見舞われ、社会道德の喪失にともなって「中華意識」のプライドを深く傷つけられた。このような時代を背景に、孫文が追及した議会制民主主義も袁世凱が目指した伝統的社会的復活も知識分子が空論をしていた「中間路線」も、またどのような既成の権威もこの中国を救うことができないことが明らかになった。このようにとき、草の根から現れたカリスマ的な権威が中華民族の運命を託されるようになる。それは、中国の歴史発展における「必然」であったかもしれない。⁽⁵⁹⁾

今日のわれわれから見れば、上述のような「カリスマ的な権威」は現代の迷信の色彩を帯びていると指摘しても間違いはない。しかし、毛沢東の彼の時代の中国では、それは必ずしも非合理的なものではない。カリスマは、正当性のあるものとしてまず時代を変えるような組織者の役割を果たしうるものでなければならない。というのは、革命を実行するにあたって、自覚的認識よりも重要なのは、宗教的情熱である。革命に参加する大衆の教育レベルが非常に低く、かつ革命の必要性が非常に切迫している場合、とりわけそうである。農民戦争を主力とする中国革命は、西欧の政治活動のように多くの理論の衝突の中から共通点を探ることはできない。思想を統一し、行動を調整するためには、優れた能力を持つ

たリーダーを持ち、彼の是非善悪を党全体の是非善悪にしなければならぬ。リーダーの絶対的権威が確立できてこそ、革命を遂行する大衆は団結でき、革命に対する忠誠と献身を具体的な対象に捧げることができるのである。中国共産党が幾度も挫折と分裂を経て、やっと毛沢東を党全体の最高権威として認めたことは、事実上、革命の失敗を救い、中華人民共和国を樹立するまで革命を導いたターニングポイントであった。

しかし、中華人民共和国を樹立してから、社会の行政管理體系を、戦争状態で形成された個人的カリスマ的権威から法律にしたがう合法的権威に転換するという問題が、有識者の視野に入るようになった。カリスマ的な組織形態は、一般的には非常事態のもとで形成される理性に欠けたものである。それは歴史の転換期には、非凡な力になれるが、その中に含まれる権力の恣意性や反経済性が、経済建設と齟齬をきたすことになるのである。近代的大工業生産や社会管理に要求されるのは、カリスマより、厳密な技術規範と社会規範、法律などなのである。

毛沢東は、戦争時代に軍隊を自由奔放に指揮してきた。しかし、前にも述べたように、彼は、建国とともにやってきた工業建設と社会管理に、極めて疎く、それにあまり興味を示していなかった。先例のない中国的社会主義の建設にあたって、毛沢東は最初はソ連の経験そのまま受け継ごうとした。⁽⁶¹⁾しかし、毛沢東は、間もなくソ連モデルに反発を覚え、それを批判するようになった。ソ連型社会主義への毛沢東の批判は、行政型の組織形態を理解できなかったことから来たものである。だから、彼のソ連型批判は、行政型の組織形態が人間性を抑圧するということに集中している。もっとも毛沢東の「人間性」は、人間だけが持つ為と理想と言うヒューマンイズムの人間性とは違い、もっぱら「人民の自発的な革命的情熱」を指す。毛沢東は、法律による統治を極端に嫌い、法律で人民大衆を拘束することが資本主義のやり方であると考えている。彼はまた、規則などの「繁文縟節」を蔑視し、それが社会主義の生産力を束縛し、官僚主義を培い、幹部と大衆との関係を離間すると絶えず指弾し

ていた。

確かに、行政型の権威は、行政組織構造に官僚政治 (bureaucracy) という形で表現された合理的な性質と非理性的な性質とをもたらす。官僚政治的形式の合理性は、行政の運営に高い効率を保証する。しかし、知識の優先と政策決定の理性化、科学化は、人間を巨大な社会組織構造のもとで指令にしたがう道具とし、伝統型の官僚主義を克服しはするが、技術型官僚主義の形成を促進し、知識を基準に新たに階層を作り出す。このような組織構造は、「人民が主人になる」ような毛沢東の理想郷とは当然相いれない⁽⁶²⁾。人間が生産諸要素の中でもっとも貴重な要素であるというのは、毛沢東が従来強調していた理論である。官僚政治という組織形態で多数の人間の「主観能動性」を抑圧するのを、当然毛沢東が快く思うはずはない。それに、毛沢東にとって、人間にもっとも重要なものは、能力と理性ではなく、人民に奉仕する意識と革命精神なのである。どうして物質の面で劣勢にあり、戦闘員の教育レベルの低い「粟プラス小銃」(食べるものは粟しかなく、武器はライフルしかない)の中国共産党が、アメリカに武装され、知識分子に指揮された国民党の軍隊を台湾に追い出すことができたのであろうか。それは、革命精神のおかげであると毛沢東は考えている。いわゆる法律によってではなく共同の感情と理想に対する忠誠によって結合された精神的団体や、物質的利益を軽んじる上下の平等の「供給制」、こうしたものに対する毛沢東の執着の原因は、そこにあると考えられる。確かに革命戦争の時代には、人間の精神(端的に言えば、カリスマ的権威に全面的信頼をもって服従する精神)が革命の原動力となり、革命の成功と直接に結びついた。だからこそ、毛沢東は、再三再四人間の精神的な力を強調し、現代化の大生産に昔の革命精神を注入し、「万衆一心」⁽⁶⁴⁾で中国式の社会主義を作ろうと企てたのである。しかし、現代化の大生産は革命精神のみに頼って達成できない。それどころか、毛沢東の指導した現代化の過程で、毛沢東が毛嫌いする官僚主義の組織形態という怪物が生まれてきた。官僚主義の組

織形態は、毛沢東が半生を賭けて打ち砕いた階層を再び作り、「待つ人」と「待たぬ人」との格差が広がってゆく。階級闘争という言葉は、毛沢東にとって、「旧社会」や「資本主義」と同意語であり、官僚主義の組織形態によって新たに生まれた階層を打ち砕くために、新たな革命が必要だということになる。このようにして、毛沢東は、彼なりの社会主義建設の過程で、彼なりに革命理論にしたがって、「不断革命」をせずにはいられなくなるのである。

毛沢東がその死まで続けた革命、特にプロレタリア文化大革命の中で行われていた伝統的な文化に対する破壊だけに着眼すれば、毛沢東は中国の伝統文化に対する反逆者であると言えないことはない。中国で出版された毛沢東についての数々の著作も、毛沢東がいつも徹底的に伝統に反逆した闘士であったかのごとくに描いている。しかし、すでに分析したように、解放後の行われた毛沢東の一連の政治運動は、伝統的文化を破壊しながらも伝統的文化の深層にある封建主義の束縛から脱したことのない、矛盾に満ちた革命運動である。

そもそも、毛沢東自身が、彼が目の敵にしてきた中国の知識分子の一人であると言える。戦争の時代でも、平和の時代でも、彼はいつも書物を手にし、先秦から清朝までのあらゆる文人の著作を満喫しており、中国の古籍に精通しており、自ら詩吟をもしている。⁽⁶⁷⁾「五・四」運動を経験した知識分子の一人として、毛沢東は儒家には批判的な態度を取っているが、墨家や老子に興味を示している。墨家は先秦時代に儒家と肩を並べる二大学問の一つであった。歴史が下るにつれて、墨家は儒家の前に影が薄くなっていったのであるが、その理念は農民の土一揆のなかに繰り返し現れてくる。墨家を好む毛沢東は、そのために歴史上の人物の伝記、特に陳涉、呉廣などから黄巢、李自成などまでの土一揆の指導者の伝記を好んでいる。毛沢東は、彼の講話のなかでこれらの土一揆の歴史的事実をよく引用している。また、『三国志』のなかの「張魯伝」を読んで、毛沢東は、張魯の「五・米道」の内容を「大躍進」や人民公社

晩年の毛沢東思想と階級闘争

と逐一比較対照して絶賛している⁽⁷⁰⁾。五巻にわたる『毛沢東選集』を通覧すればわかるように、毛沢東の論文は、マルクス・エンゲルスの著作にはあまり触れておらず、レーニンの著作もわずかしき引用していない。しかし、中国の古籍は、四書五経から諸子百家、二十四史、「資治通鑑」、詩詞曲賦、筆記小説などにいたるまで、これでもかと言うほど引用されている。中国の伝統文化は、毛沢東思想を生んだ土壌といっても過言ではないであろう⁽⁷¹⁾。墨家の鼓吹する「非命」、「節用」などのような農耕を重視する思想、「交利」、「兼愛」などのような理想の楽園への憧れ、「天志」、「尚同」などのような宗教専制の主張は、毛沢東が好むものであり、それらは、墨子思想体系の三大支柱である。その内容には、晩年の毛沢東の実践と類似するところが多いことに留意すべきである。

墨家思想や老子思想はそもそも中国の小農経済の理想郷に関する学説である。毛沢東は農民出身の知識分子で、農村生活が彼に与えた影響は大きいものがある。マルクス・レーニン主義の学説を信仰する知識分子として、毛沢東はプロレタリア思想で中国の人民大衆、特に農民を教育し改造しようとしてつとめた。にもかかわらず、毛沢東の精神は、農民と切っても切れない関係にある。毛沢東は、農民のことをいつももっとも先に念頭に置き、農民を理想化し、神聖化している。毛沢東は中国の歴史上で、最大かつ最後の農民戦争を指導したのである。長年の農村生活のなかで形成された農民本位の思惟方式や、農民への共感、農民を知る心理などは、農民戦争を通して受け継がれた墨家思想や老子思想や外来のマルクス主義の理論と融合し、毛沢東的な国粹主義の形で現われている。毛沢東は、農民を率い、時代遅れの武器で、アメリカに支持され、武器にまさる蒋介石を打倒し、新中国を築き上げることができたのであるから、農民の伝統的なやり方で、自分流の社会主義的現代化をも実現することができる⁽⁷²⁾と信じて疑わなかった。中国人民は「一に貧困、二に空白」であり、中国には、現代化を実現させる科学技術が欠けていた。それを補うために、毛沢東は、西洋の近代化の過程を無視し、中国の伝統に根

を深く下ろしている自発的な小農経済の経験や軍事闘争で得られた経験や習慣、伝統文化に影響された観念などを生かし、思想や政治、大衆運動、犠牲的精神、これらに頼って世界を変革しようとした。また、毛沢東は、その過程を妨害していると目される者に、「資本主義」や「修正主義」などのようなレッテルを貼って除去し、道を開こうとした。プロレタリア階級とブルジョア階級との戦いという理念で行われた毛沢東の階級闘争は、実のところ、両軍対戦の戦争時代のモデルを社会生活に応用したのもでもある。毛沢東の階級闘争は、近代思想をつぶそうとする小生産者の情熱と相まって、悪い事物と現象をブルジョア階級や資本主義の範疇に押しつけ、よい事物と現象をプロレタリア階級や社会主義の範疇に取り囲む。このような手法のなかで、プロレタリア階級とブルジョア階級との階級闘争は、労働と搾取、「公」と「私」、「善」と「悪」という対立するもの間の闘争となり、本来特定の歴史的時代のものであった観念がいわば時代を超越する倫理道德観として現出している。中国の現代政治のどのページを開いても、そこには道德的な観念や基準が充満している。⁽⁷³⁾ いわば、中国の現代政治の特徴は、政治が道德化され、道德が政治に置き換えられるところにある。

前にも触れたように、政治を道德化したこの種の「政治的道德観」は、中国社会と中国の伝統文化に深く根を下ろしている。中国の封建社会は一貫して、倫理道德をイデオロギーの基本的核心にしている。宋朝、明朝の理学の神髄である「克己復礼」や「正心誠意」は、長いあいだ社会の統治意識と統治者の正統哲学であり、中国人の心の奥底に沈殿してきた文化でもあった。その文化が、未来の理想郷に対する憧れと結合して、革命的道德、集団主義、自己犠牲、忠誠など、いわゆる「万衆一心」の形で現われているかぎり、個人の利益や自由、独立、平等などは、当然取るに足らないものの如くにみられてしまう。⁽⁷⁴⁾

政治の道德化は、中国の伝統的文化の核心的内容の一つとして、専制政治を正当化し維持する働きをしてきた。政治の關係に比べれば、経済

晩年の毛沢東思想と階級闘争

生活との関係は間接的なものではあるが、道徳は、経済生活にもまた深く影響を与えている。政治制度がいったん道徳化されると、その政治制度があたかも自然発生的なもので永久不変のものであるかのような潜在的観念を人々の社会的認識に植え付けることになる。さらに、政治が道徳化されることを通して、道徳の要求は、社会の生活の中で無上の原則になり、政治方針や法律規範から生活習慣にまで浸透しそれらを制約する。そこに、いわゆる道徳の専制主義が成立する。

道徳の専制主義も一種の専制主義である。道徳の内容は専制主義の性質を換えることはなく、ただ道徳の自覚という特殊の方法で専制主義を調整し、それを恒常の軌道から逸脱しないようにし、それにさらに強い力を与えるのみである。それ故、道徳の専制主義はより徹底的な専制主義であるといえよう。このような専制主義は、帝王を人格的象徴とし、⁽⁷⁵⁾道徳化された政治的な力で社会におけるすべての構成員を全面的に制御するという形で表現される。その制御は、強制的なものでもあり、社会の構成員の自覚にもとづくものでもある。

中国の社会主義革命に、特にプロレタリア文化大革命に反映された毛沢東の政治的道徳観は、中国社会における小生産の文化的伝統の延長であり、中国的伝統文化の現代社会への反抗でもある。義を尊ぶことや尊を講じること、己を克すること、忠を尽くすことなどのような倫理道徳の要求は、中国の伝統的な美德である。歴史は確かに皮肉なものである。理論的に、毛沢東は儒家に反抗する猛者である。しかし、感情が科学に代替することはできない。毛沢東は、刻苦奮闘して、中国の社会経済制度を商品経済から徹底的に切り離し、道徳の力で社会の「清潔」を保とうとして、かえって封建的伝統のもっとも有力な維持者となったのである。商品経済こそが儒家伝統の挑戦者であることを、毛沢東は理解できなかったのであろうか。

いうまでもなく、中国の伝統文化とその文化思想に浸透された中国の人民大衆の「自覚」があるからこそ、小生産を保護する封建政治は、毛

沢東的な政治の道德化や政治優先などの形に変わり、中国の歴史の舞台に登場することができたのである。毛沢東の率いた最後の大衆運動—プロレタリア文化大革命も、そのような伝統文化とその文化思想に浸透された人民大衆をベースに行われたものである。そもそも中国の政治的道德文化は、政治権力に対する無上の崇拜と自覚的服従、政治に対する関心という中国的な国民性を基本にしたものである。中国の歴代の知識分子は皆、「国を治め、天下を平定する」ことを人生の最高の理想とし、官僚になることを人生の唯一の正しい道であるとしている。⁽⁷⁶⁾中国の伝統的政治文化においては、人生の最終目標として、「三つの不朽」があげられている。「三つの不朽」の具体的な内容は、「大上有立德，其次有立功，其次有立言」⁽⁷⁷⁾（「大上立德あり，其の次立功あり，其の次立言あり」）というものである。それを現代語に訳せば、「（人間が不朽になる）もっとも最高の道は、徳を立てることであり、その次は、功を立てる（戦争で業績を上げること）ことであり、またその次は、言葉を立てる（著書をもつこと）ことである」という意味になる。「立德」は、文字どおりの道德修養や文化教育などではなく、「大上以徳撫民」⁽⁷⁸⁾（大上は徳を以て民を慰めること）や「為政以德」⁽⁷⁹⁾（政を為すには徳を以てする）」という言葉で表明されたように、政治における業績を指している。世界の中で問題を考えると、中国のような、知識分子から一般国民まで、国民全員が熱狂して飽きもせず政治運動に参加し、それがいつも社会の動乱をもたらすような国は、ほかにないかも知れない。政治的道德の意識が民族全員の精神的主体である国で、毛沢東の政治革命や思想革命がスムーズに遂行されることができなかつたとすれば、それはかえって奇怪なことであろう。

ただし、毛沢東の「政治的道德観」には、中国の伝統文化と違って、階級闘争の伏流がいつもわき上がっている。そのために、社会主義を實現させる過程において、毛沢東の階級観の基準は、安定や「和」を目的とする特徴を持っている伝統的政治的道德観を取り替えた。階級観を基

晩年の毛沢東思想と階級闘争

準とする公と私の毛沢東の振り分けは、伝統的な倫理の要求より強制的な要素が含まれている。これらのすべてが「人民大衆のために」という崇高な目的を前提としていた。そのために、中国を救い、人民を救うという崇高な目的と信念をもって毛沢東の麾下に集まり、革命という旗印のもとで革命的倫理や道徳を求められ教育された人々は、理性の上だけでなく感情の上でも積極的に毛沢東の革命に忠誠を誓って参加した。さらにまた、そうした人々は、自分の行動が毛沢東の路線からはずれていると批判されたときには、自己改造、自己貢献、自己批判までを誠心誠意に行おうとしたのである。前述の知識分子批判のさまざまな運動とプロレタリア文化大革命の中で行われた知識分子の自己批判の多くは「労働者階級」に強制されたものであるというよりはむしろ、知識分子が自⁽⁸⁰⁾ずから真剣に遂行したものである。

プロレタリア文化大革命は文化に対する批判から始まったもので、『武訓伝』批判や俞平伯、胡適批判、反右派運動などと一脈通ずる政治・文化批判でもあった。違っているのは、プロレタリア文化大革命の打倒の対象が、知識分子から「共産党内部に潜り込んだ資本主義の道を歩む実権派」にシフトしたことである。もっとも次のようなことは、毛沢東がプロレタリア文化大革命を引き起こす現実的な理由であろう。数十年に亙った革命戦争が終わりを告げると、平和の時代は、日常生活のなかにある物質利益の問題を露見させる。「供給制」は50年代から資金制に、戦争時代の命令や集中などの習慣は位階制に取って代わられた。毛沢東の言う「資本主義の影響」（ここでの「資本主義の影響」という用語は、「封建主義の影響」という意味あいとして理解したほうがよい）は迅速に、下部構造から上部構造まで輪をかけて蔓延していき、人民大衆のあいだに不平不満がくすぶっていく。それ故、毛沢東がいったんプロレタリア文化大革命の火をつけるとまたたく間にその火が全国に燃え広がり、中国の人民大衆は熱狂的にプロレタリア文化大革命の戦闘に身を投じ、革命や造反有理という大義名分のもとで殺しや破壊を繰り返し

たのである。

プロレタリア文化大革命は、一見して理性を失った「革命運動」のように見えるが、完全に理性をなくしたものではない。上に分析したように、プロレタリア文化大革命の根底にある理論の中心は相変わらず、伝統的な政治的道德理論に基づいたものである。そのうえに、公と私との関係、集団と個人との関係、共産主義の理想、二つの階級と二つの路線のあいだにおける階級闘争などのような理論と思想とがつけ加わっている。このようにして、中国の伝統文化に毛沢東個人の経験とマルクス・レーニン主義理論の一部とをミックスさせ利用した晩年の毛沢東思想は、⁽⁸¹⁾中国の人民大衆の理性的の信仰になり、道徳的宗教の如きものとなった。

毛沢東思想は、一方では雄大な理想で、他方では閉鎖的な知識構造であり、一方は伝統に反する造反精神で、他方は伝統思想にこだわる陳腐な心理である。この二面性は、「大躍進」から「プロレタリア文化大革命」まで、新中国を建設した時代のあらゆる政治運動を設計した指導者毛沢東の矛盾であり悩みである。しかし、毛沢東は予想したことがあったらうか、彼の最後の革命であるプロレタリア文化大革命が、彼の理想郷を完全に破壊してしまうであろうことを。中国全土の色を塗り替えることができるほどの毛沢東と肩を並べるような偉大な人物は、毛沢東の時代を経験した後の中国ではもはや生まれないであろう。にもかかわらず、毛沢東は、中国の伝統文化と「中国特色的社会主義」（現中国共産党主席、中国軍事委員会主席、中国国家主席の江澤民語、「中国という特色をもつ社会主義」という意味）とともに生き、毛沢東と同じ理想郷を夢見る多くの中国人に、必ずや力強くその影響を与えて続けていくに違いないであろう。

付録：毛沢東略年表

1893年 12月26日、湖南省湘潭県韶山沖に生まれる。父は順生、母は文七妹、弟に沢民、沢覃がおり、兄、姉妹はいない。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

- 1901年 私塾に通い始める。
- 1906年 私塾を辞め、野良仕事に従事。夜は記帳などで父親を助ける。
- 1910年 長沙に暴動が起こる。毛氏の宗廟で族長と争う。父の米が略奪される。家を離れ、湘郷に行き、小学校（東山高等小学堂）に入学。
- 1911年 長沙に行き、中学（湘郷中学）に入学。弁髪を切り落とす。辛亥革命勃発。革命軍に応募する。
- 1912年 軍隊を辞め、高等商業、省立第一中学などで学生生活の後、図書館で独学。
- 1913年 長沙の省立第四師範に入学。同校は後に第一師範に合併される。第三学年から校友会執行委員会書記に就任。
- 1917年 「体育の研究」を『新青年』（3巻2期）に発表。
- 1918年 新民学会を組織。第一師範を卒業。北京に行く。楊昌済の家に寄寓、北京大学図書館で働く。
- 1919年 北京を去り、上海を経て長沙に帰る。湖南学生連合会を組織。『湘江評論』を創刊。軍閥張敬堯追放を組織。北京に赴く。（ロシア革命）、マルクス主義の入門書を読む。母が死去。
- 1920年 楊昌済が死去。父が死去。北京を去って上海へ行き、陳独秀に会う。長沙に帰り、文化書社を開く。「湘南共和国」を提唱。
- 1921年 中国共産党の創立に参加（第一回全国代表大会、上海）。楊開慧と結婚。長沙小呉門外清水塘7号に住む。中共湘区委員会設立、書記に就任。
- 1922年 中国共産党第二回大会。参加できず。安源炭鉱ストを指導。
- 1923年 中国共産党第三回大会（広州）。『響導週報』に執筆。
- 1924年 国民党第一回全国大会に参加。国民党上海執行部で活動。
- 1925年 中国共産党第四回大会（上海）、欠席。
- 1926年 「中国社会の各階級の分析」を発表。農民運動講習所所長に就任。湖南省農民代表大会（第一回）に出席。
- 1927年 湖南省の農民運動を視察。韶山に帰る。「湖南農民運動視察報告」執筆。蔣介石、上海でクーデター、共産党を弾圧。蜂起を指導、失敗して井崗山へ。「三項の規律」を公布（後「八項の注意」を追加）。以後、ゲリラ戦を展開、福建省にも出撃(1929)。
- 1928年 中国共産党、モスクワで第六回大会。出席できず。
- 1930年 朱徳とともに南昌を攻撃、成功せず。国民党、ソビエト区に侵入、第一回の包圍討伐を受ける。
- 1931年 上海の党中央委員会総会、毛沢東を批判。中華ソビエト共和国成立、主席に就任。
- 1932年 寧都會議で批判される。會議の主催者は周恩来。

- 1934年 党中央から観察処分を受ける。中国共産党、中華ソビエト共和国の首都、瑞金を放棄「万里の長征」を始まる。
- 1935年 貴州省遵義での中央政治局拡大会議で復権。婁山関の戦闘を指揮。陝西省北部に到着。
- 1937年 保安でアメリカ人記者エドガー・スノーと談話。
- 1939年 スターリンの六十歳を祝う大会で演説、マルクス主義を要約すれば「造反有里」だと述べる。(第二次世界大戦始まる)
- 1940年 「新民主主義論」発表。
- 1941年 『農村調査』発刊に際し、序文と跋文を執筆。「我々の学習を改造せよ」の演説。
- 1942年 「党の作風を整理せよ」の演説、整風運動始まる「文芸講話」を発表。
- 1945年 中国共産党第七回大会。「若干の歴史問題に関する決議」採択。党規約に「毛沢東思想」が入る。中央委員会主席に就任(日本敗戦)
- 1946年 国民党と内線。延安を撤退。
- 1947年 人民解放軍、国民党軍に総反攻宣言。「中国土地法大綱」を公布。
- 1948年 人民解放軍、東北で四平街を占領。河北省平山県西柏坡村に到着。
- 1949年 北京に入る。人民解放軍、南京を占領。10月、北京、天安門上において、中華人民共和国の成立を宣言。12月、モスクワへ赴く。
- 1950年 2月、「中ソ友好同盟相互援助条約」に調印(有効期間30年)し帰国。10月、人民解放軍、チベットに出兵。11月、人民志願軍、朝鮮に出兵。
- 1951年 5月、映画『武訓伝』批判を始める。思想改造運動を始める。
- 1953年 3月、スターリンの死去に際し、追悼文を書く。梁漱溟の発言に激怒、反論を加える。
- 1954年 9月、国家主席に就任。10月、『紅樓夢』の研究方法的批判を開始。
- 1955年 5月、胡風批判を始める。7月、農業協同化(合作社創出)に乗り出す。『中国農村の社会主義の高潮』をまとめる('56年1月出版)。
9月、朱徳らに元帥授与。
- 1956年 (2月、ソ連でスターリン批判) 4月、「十大関係」演説。「百花齊放・百家争鳴」を唱える。9月、中国共産党第八回大会。(10月、ハンガリーで暴動。)
- 1957年 2月、「人民内部の矛盾を正しく処理する問題に関して」演説。5月、第二次整風を始める。6月、反右派闘争を發動。11月、モスクワへ赴く。十月革命四十周年記念式典と社会主義諸国共産党労働者党代表者会議に参加。
- 1958年 8月、人民公社を肯定、大躍進始まる。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

- 1959年 4月、国家主席に再選されるが辞退、劉少奇、国家主席になる。7月、廬山会議で彭徳懐が人民公社を批判。彭の国防部長を免じ、林彪を登用。
- 1960年 7月、ソ連、中国に派遣していた技術者を引き上げる。
- 1961年 ソ連で刊行の『政治経済学』の読書会を開き、批判を加える（1961～62年の執筆のこの批判についてのノートがある）。
- 1962年 1月、拡大の中央工作会議（「七千人大会」）で自己批判。
- 1963年 5月、社会主義教育運動について指示。階級闘争を強調。6月、ソ連共産党に対し書簡を送り、ついで公開論争を開始。
- 1964年 1月、元旦にあたり全国主要都市で詩集『毛沢東詩詞』を発売。「日本人民の偉大な愛国闘争を支持する」談話を発表。
- 1965年 1月、社会主義教育運動に関連して、「党内の資本主義の道を歩む実権派」という規定を用いる。（11月、姚文元の呉晗批判論文を発表）12月、「十大関係を論ず」を共産党内部の県・連隊クラス以上に下達。
- 1966年 5月、「五七指示」、「五・一六通知」を公布。6月、韶山に帰り滴水洞に隠れる。6月、劉少奇、各大学に工作組を派遣、翌月撤退。7月、武漢から江青夫人に手紙。8月、中共中央政治局拡大会議で「司令部を砲撃せよ」の壁新聞を書く。「プロレタリア文化大革命に関する決定」を採択。天安門広場で紅衛兵を閲兵。プロレタリア文化大革命始まる。
- 1967年 1月、劉少奇と最後の対面。人民解放軍の革命的左派支持を下部に伝達。2月、「上海コミュン」に承認を与えず。軍の長老による文革非難（『二月逆流』）。4月、各地に革命委員会が成立。5月、アルバニア軍事代表を接見。
- 1968年 7月、紅衛兵の指導者に「武闘（武装闘争）を止めよ」と指示。清華大学に毛沢東思想宣伝隊進駐。8月、毛沢東思想宣伝隊により紅衛兵を北京の全大学から排除。9月、全国で革命委員会の成立完了。
- 1969年 3月、珍宝島で中ソ両軍衝突。4月、第九回党大会、党主席毛沢東、副主席林彪。党規約に林彪を後継者と明記。（11月、劉少奇が死去）
- 1970年 4月、『人民日報』などに共同署名論文「レーニン主義なのか、それとも社会帝国主義なのか」を発表。8月、陳伯達の「天才論」に反論。
- 1971年 9月、林彪、モンゴルで墜死。
- 1972年 2月、ニクソン・アメリカ大統領と会談。9月、田中角栄首相と会談。
- 1973年 3月、鄧小平を復活させる（國務院副総理）。7月、孔子批判を進

- め、これを林彪批判と結合するように指示。8月、第十回党大会を主宰。12月、政治局会議において、鄧小平を中央政治局委員、中央軍事委員会委員、総参謀長に任ずることを提案。
- 1974年 1月、大平正芳外務大臣と会見。2月、批林批孔（林彪と孔子批判）運動本格化、周恩来癌で入院。
- 1975年 1月、鄧小平、中共中央副主席、中央政治局常務委員会に選出され、入院の周恩来に代わって日常工作を指導。9月、『水滸伝』の山寨の首領・宋江に対する批判を始める。11月、「右傾巻き返し風」に対する反撃を始める。
- 1976年 1月、周恩来死去。4月、周恩来を悼み、群衆天安門広場に集まり騒動発生。鄧小平を解任、華国鋒を党第一副主席、国務院総理に昇格させる。9月9日0時10分に毛沢東死去。享年82歳。10月、江青夫人らの逮捕。華国鋒、党主席、中央軍事委員会主席に就任。「プロレタリア文化大革命終焉。
- 1977年 7月、鄧小平復権。

注

- (1) 毛沢東「接見阿爾及利亞代表团的談話」（「アルジェリア代表団を接見した時の講話」）、1964年4月15日、雑誌『走向未来』、第7期、何平「毛沢東晩年文化思想散論」を参照。
- (2) 毛沢東「關於坂田文章の談話」（坂田の文章に関する講話）1964年8月24日、雑誌『走向未来』、第7期、何平「毛沢東晩年文化思想散論」（晩年の毛沢東の文化と思想とを論ずる）を参照。
- (3) 毛沢東『毛沢東選集』第5巻、人民出版社、1977年、p.333。
- (4) 毛沢東「關於正確處理人民内部矛盾的問題」（「人民内部の矛盾を正しく處理する問題について」）（講話原稿）、参照。この話は、最初に北京特鋼廠の『毛沢東文献三十篇』（pp.94-95）に収録された。『学習文選』（出版地、出版社名なし、1967年）、『毛沢東哲学思想教学研究参考資料』（二）、北京大学哲学係、毛沢東哲学思想教研室、1983年、Roderick Macfarquhar, Tomothy Cheek, and Eugene Wu, Eds., *The Secret Speeches of Chairman Mao—From the Hundred Flowers to the Great Leap Forward*, The Council On East Asianstudies, Harvard University, 1989, 所収。
- (5) 新聞『解放日報』、1952年6月3日。
- (6) 山東大学『文史哲』編集委員会発行『文史哲』、1954年第9期、pp. 22-24。
- (7) 前掲書『毛沢東選集』第5巻、pp.209-210。
- (8) 胡適は、青年期の毛沢東の世界觀の形成に大きな影響を与えている。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

それは、エドガー・スノーとの対談で、毛沢東自身によって肯定されている。汪樹白、張慎恒「青年毛沢東世界観の転変」（『歴史研究』、1980年5期）という論文は、以下の二つの事実に注意を促している。すなわち、胡適が毛沢東を賞賛していたことと、毛沢東がプラグマティズムを指導思想として注目していたことである。毛沢東とエドガー・スノーとの対談は、*The Long Revolution*, (London: Hutchinson, 1973) に付録として収録されている（*The Long Revolution*, pp.194-19 を参照）。

- (9) 金春明主編『毛沢東思想発展史』、中共中央党校出版社、1933年、p.609。
- (10) 『文藝報』1955年第1・2号付録小冊子、pp.140-143。
- (11) 1955年5月13日付け『人民日報』
- (12) 1955年5月13日—6月10日の『人民日報』を参照。
- (13) 後に中国の有名な作家巴金は「胡風を偲ぶ」という文章の中で、釈放された胡風と再会したときの印象を次のように書いている。「快活でエネルギーギッシュな詩人は、無表情な、まるで生気のない病人に変わり果てていた。どれほどの迫害や試練にさらされたことだろう。…列の30万語の“上奏文”は読んだが、直に忘れた。ただ、よくよく考えてみれば、なにも大きな誤りはないように思えた。」（巴金『無題集』、人民文学出版社、1986年、pp.175-176。）
- (14) 19世紀のハンガリーの愛国的詩人ペトフィにちなむ作家組織。1956年のハンガリー事件に際して、理論面で中心的な役割を果たした。
- (15) 1956年6月13日付け『人民日報』を参照。1954年に公布された中華人民共和国の憲法は、中国の国民は、言論の自由や集会の自由、出版の自由をもっと規定している。しかし、毛沢東の実際の行動と共産党の政策は、そのような法律に制限されたことはない。1949年の建国以来、知識分子は、ひっきりなしの思想改造の運動に喘いでいる。知識分子が、自分の改造はまだ十分ではないと意識するときには、自分の「旧い思想」を胸の奥に隠すことのみである。中国の憲法は、思想改造の運動に苦しんでいる知識分子に何の役にも立たなかった。毛沢東は、「關於正確處理人民内部矛盾的問題」という前掲の論文の中で、反対陣営の言論の自由に関し、次のように明け透けに言っている。「ことはいとも簡単である。彼らの言論の自由を剝奪すればよい」、と。
- (16) 周恩来は1956年に、当時の経済建設における知識分子の重要性を「關於知識分子問題的報告」（「知識分子の問題に関する報告」）にまとめ、次のように述べている。「我々の知識分子の力は、数から言っても業務レベルから言っても、悪いは政治的自覚から言っても、社会主義建設の急速な発展の必要に釣り合わない。それは、当面の根本的な問題である」、と。

- 『周恩来選集』下, 人民出版社, 1978年, p.161。
- (17) 1956年9月9日付け『人民日報』を参照。
- (18) 中共中央文献研究室『党的文献』, 中央文献出版社, 1990年第3号を参照。
- (19) 日本国際問題研究所中国部会編『新中国資料集成』, 第5巻, pp.353-355。
- (20) 「關於正確處理人民内部矛盾的問題」を参照。
- (21) 中共中央文献研究室編『建国以来毛沢東文稿』第6冊, 中央文献出版社, 1988年, pp.455-456を参照。
- (22) 毛沢東は, 関係する講話で, 次のように言っている。「私が『百花齊放, 古きを斥け新しきを出す』と書いた。春が来たら百の花が一斉に開く。いくつかだけではないし, ある花だけでもない。百花齊放だ。百家争鳴は春秋戦国の時代, 二千年も以前のことだが, 多くの学派, 諸子百家がいて自由に討論した。今われわれにもこれが必要だ」と。中共中央文献研究室『党的文献』, 中央文献出版社, 1990年第3号, p.20。
- (23) 毛沢東『毛沢東選集』第2巻, 人民出版社, 1951年, p.618。
- (24) 毛沢東「論聯合政府」(「連合政府論」, 毛沢東『毛沢東選集』第3巻, 人民出版社, 1963年, 所収)。中国共産党は, 1949年に政權を樹立してから反右派運動までの8年間に, 確実に教育に力を注いだ。そのため, 小学生の数は, 2,600万人から6,400万人に増え, 大学生の数は, 11.7万人から44.1万人に, それぞれほとんど四倍に増えた。
- (25) 前掲書『毛沢東選集』第5巻, p.346。
- (26) 前掲「關於正確處理人民内部矛盾的問題」を参照。
- (27) 前掲書『毛沢東選集』第5巻, pp.642-643。
- (28) 中共中央文献研究室編『建国以来毛沢東文稿』第6冊, 中央文献出版社, 1988年, pp.455-456。
- (29) 『新中国資料集成』第5巻, pp.379-381を参照。
- (30) 同上, pp.382-383を参照。儲安平の主張と共産党の指導については, 「政治改革と共産党の指導」(日本国際政治学会編『国際政治』第112号「改革・開放以後の中国」, 1996年5月)という唐亮の論文に詳しい分析があり, 特に36頁の「党政分離の政治過程」という段落における分析を参照されたい。
- (31) 前掲書『毛沢東思想發展史』, pp.617-618。
- (32) 前掲書『毛沢東選集』第5巻, pp.653-659。
- (33) 前掲書『建国以来毛沢東文稿』第6冊, pp.502-503。
- (34) 毛沢東「打退資産階級右派的進攻」(「ブルジョア階級の右派の進攻を撃退しよう」), 毛沢東『毛沢東選集』第4巻, 人民出版社, 1951年, 所収。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

- (35) 前掲書『毛沢東選集』第5巻, pp.705-717。
- (36) 寥蓋隆「歴史的経験と我們的發展道路」, 『中共研究』第15巻第9期, 1981年9月, p.142。
- (37) 右派と判定する基準については, 中共中央が1957年10月15日に公布した「右派を区分する基準とそれについての通達」(中共中央党学校史教研室編『中共党史参考資料』[8], 人民出版社, pp.667-670)を参照できるが, その中で, 右派である基準が六つ, 極右分子である基準が四つ定められている。たとえば, 「右派分子区分の基準」の一は次のように決められている。
- 「社会主義制度に反対し, 都市と農村の社会主義革命に反対し, 共産党と人民政府の社会・経済の基本政策(たとえば工業化, 統一購入, 統一販売など)に反対する者。社会主義革命と社会主義建設の成果を否定する者。資本主義の立場を堅持し, 資本主義制度のブルジョア階級の搾取を誉め称える者。」
- 以上のような基準に照らして右派分子を捜せば, 恐らく自分の頭で物事を判断しない者だけが右派分子にならないであろう。
- (38) 叢進『曲折発展的歲月—1949-1986年の中国』(『曲折に発展した歲月—1949-1986年の中国』), 河南人民出版社, 1989年, pp.232を参照。
- (39) 中共中央「關於建国以来党的若干歷史的問題的決議」, 太田, 他編『中国共産党最新資料集』(下), 所収, 勁草書房, 1989。
- (40) 中央教育部革聯編集, 『毛主席論教育革命』, 1967年, pp.172-174を参照。
- (41) 同上, pp.194-203を参照。階級の形成が財産の多寡によるのではなく, もっぱら収入と地位によるような社会においては, 教育は, 社会における経済的平等感いは不平等を作り出すのに大きな力をはたせる。中国の場合, 教育が毛沢東の心配する不平等を作り出したことは否めない事実であろう。50年代の教育事業の長足な進歩で, 人民大衆は, 国民党の時代よりずっと教育を受けるチャンスに恵まれた。しかし, 教育を受けるチャンスは相変わらず平等ではなかった。高校や大学の正式の教育を受けるために設けられた制度は, 特権階級, いわば党や政府の幹部の子供と知識分子の子供に有利である。また, 都市と農村における教育機関の分布に大きなギャップがある。新しく設置した大学さえも相変わらず都市に集中し, 募集する学生もほとんど都会人である。それに対して, 農村出身の人々の多くは, 小学校での教育さえ満足に受けるチャンスがない。これは, 毛沢東の目に, 非常に危険な現象として映っていたようである。経済と教育の進歩の代わりに払った代価は, 官僚階層と技術特権階層の發展と, 新しい形で都市と農村との不平等である。

- (42) 同上, pp.195-196を参照。
- (43) 同上, p.198。
- (44) 同上, p.56。
- (45) 毛沢東「在拡大的中央工作会議上の講話」(「拡大中央工作会議における講話」), 『毛沢東思想万歳』(出版地, 出版社名なし, 1969年版), 所収。
- (46) 前掲書『毛沢東選集』第5巻, p.427。
- (47) 1968年7月22日付けの新聞『人民日報』を参照。
- (48) 実際に、「旧社会」出身の知識分子の数は限られており、中国の知識分子の多くは、毛沢東時代に育てられたものである。1949年解放当初、中国の科学社や技術者の数は、わずか50万人であると言われている。しかし、プロレタリア文化大革命が始まる1966年までに、その数は、250万人(一説、384万人)に増えていた(資料: 国家統計局編『偉大的十年』, 1959年, S.Chandrasekhar, *China's Population*. Hong Kong, 1959. 中国研究所編「新中国年鑑」, 全集, 『毛沢東選集』第5巻, 周恩来「關於知識分子問題」, 1965年7月30日付け『人民日報』, 文化大革命的起源翻訳組訳『文化大革命的起源』, 人民出版社, 1989年。各資料に発表された知識分子の数が違うので、上に引用した数字も、あくまで参考のためのものである)。
- (49) 東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』(下), pp.295-296。
- (50) 毛沢東「春節講話的要点」(「春節講話的要点」), 前掲書『毛沢東思想万歳』(下), 所収。
- (51) 毛沢東「政治局常委拡大會議上の講話」(「政治局常務委員会拡大會議での講話」), 前掲書『毛主席論教育革命』, 所収。
- (52) 「ソ連『政治経済学』読書筆記」, 参照。前掲書『毛沢東思想万歳』1967年版, 所収。
- (53) 毛沢東の知識の私有の打破を目指す発言や知識分子の持っている知識の社会的な役割を否定するような発言は、1964年以後特に多く見られる。前掲書「毛主席論教育革命」や『毛沢東思想万歳』などに収録された毛沢東の講話、たとえば、「在春節座談会上的談話」(1964年2月13日), 「接見阿爾及利亞代表團的談話」(1964年4月15日), 「与毛遠新的談話」(1964年7月5日), 「關於坂田文章的談話」(1964年8月24日), 「接見尼泊爾教育代表團時的談話」(1964年8月29日), 「接見蘇班德里約時的談話」(1965年1月27日), 「聴取衛生工作匯報的指示」(1965年8月2日), 「在杭州會議上的講話」(1965年12月21日), 「1966年3月21日对医务工作者的指示」(1966年7月22日付けの『人民日報』) など, 参照。
- (54) 1969年4月に採択された新党規約では、「毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と革命の具体的実践を結合させ、マルクス・レーニン主義を継承、保衛、発展させ、マルクス・レーニン主義を新しい段階

晩年の毛沢東思想と階級闘争

にまで引き上げた」と高らかに誇った。毛沢東思想に対するこのような認識は、共産党の教科書に今でも根強く残っている。

- (55) たとえば、もともと古代ローマ人の中の最下層の階級を意味した「プロレタリアート」は、マルクスにおいては、資本を持たない労働者、すなわち賃金労働者を意味した。「プロレタリアート」の中国語訳は、「無産階級」で、いわゆる財産を持たない階級を意味する。毛沢東に使われるプロレタリアートという言葉の中国語訳は、その文字から言えば、賃金労働者というよりむしろ貧乏人を指すのである。
- (56) 『美国友好人士斯诺訪華文章』（『アメリカの友好の人士スノーが中国訪問したときの文章』（内部出版）、人民出版社、1971年を参照。
- (57) 『『關於建国以来党的若干歷史問題的決議』注釈本』、人民出版社、1983年、p.34。
- (58) 大谷敏夫『中国近代政治思想史概説』、汲古書店、1993年、pp.240-266を参照。
- (59) 権威の概念については、Peter M. Blau, *Critical Remarks on Weber's Theory of Authority*, *American Political Science Review*, June, 1963, を参照されたい。
- (60) 毛沢東は、その点について次のように語ったことがある。「私を例に挙げれば、私も経済工作のなかの多くの問題が分からず、工業、商業をあまり知らない。農業を少しぐらい知っているが、比較的分かる程度のもので、多くは分からない。」（鄭謙『晩年歲月』、中国青年出版社、1995年、p.161を参照）。
- (61) 1949年以後の中国に対するソ連モデルの影響についてのもっとも鋭い分析は、Franz Schurmann, *Ideology and Organization in Communist China*, 2nd Ed., ENL. Berkeley: University of California Press, 1968, Esp. PP.13-15, 33-45, 239-242 の中に見られる。
- (62) 毛沢東時代の中国では、技術型の官僚主義がまだ幼年期にすぎず、社会で力を振った官僚主義がほとんど伝統型の官僚主義であることを、ここに付け加えておきたい。
- (63) 中国での法律に関する定義にも問題がある。中国で出版された法律に関する教科書（たとえば、『馬克思双寧主義關於法律和革命法制的理論』、人民出版社、1956年）の多くは、次のように法律を定義している。つまり、法律は、統治階級の意志を具現するものであり、国家によって制定され認可される行為規範の総称である、と。その定義に、法律は、統治階級や国家と融合された。国家はまた、階級闘争の産物であり、階級統治の道具であるから、法律は自然に、階級闘争の産物や階級統治の道具として類別される。このような考えのもとにいくら「法治」を唱えても、結局法律は、

階級闘争の一部に組み込まれてしまうことになるのであろう。

- (64) 「万衆一心」と目下の中国共産党が求める「安定団結」とは、中国の伝統政治において社会状況を評価する二つの基準である。そのような目的を達成するための先決条件は、統治者の素質である。統治者が聖人君子であり、百姓を心配し同情するのであれば、百姓の信頼と支持を得られ、「安定団結」の政治的効果を獲得することができる。同じように、統治者は、聖人君子であるからこそ、自ずから範を垂れ、百姓を教化し、百姓の尊敬と追随を手にし、「万衆一心」の社会的効果をもたらされることになるのである。「万衆一心」と「安定団結」という二つの政治統治の目的を実現すれば、「天下大治」（天下を完全に治める）の状況に達すると考えられたのである。
- (65) 「現代化」という概念をいかに定義するにせよ、毛沢東時代の中国の社会経済を変えたいかなる変革をも「現代化の過程」と字面通りに理解してはいけな。何しろ、私有制を廃止することは、現代化の旗印ではないからである。毛沢東時代の中国では、生産手段の国有化と集団化を実現してから、大規模の工業化を図ったのである。だから、工業化は、毛沢東時代の現代化という概念の本質である。ただし、毛沢東時代の工業化は、国家の指導と国家所有制の基礎の上に行われたものである。工業化の過程は目的ではなく、社会主義という目的を実現する手段であり、新しい社会主義制度を生存させ発展させる、物質的な前提を獲得するための便宜的な策である。
- (66) 中国政治における官僚主義の組織形態について、*Politics in China* (James R. Townsend. Little, Brown and Company, Inc. 1974) に鋭い分析があるから参照されたい。
- (67) 郭金榮『毛沢東的晩年生活』, 教育科学出版社, 1993年, 鄭宜主編『毛沢東生活実録』, 江蘇文芸出版社, 1992年, pp.211-224, 楊建業「在毛主席身边讀書」(「毛主席の身边で讀書する」), 『光明日報』1978年12月29日を参照。中国で出版された毛沢東の私生活の「実録」は、毛沢東を美化しており、国外で出版されたものと内容が一致するところも少なく、その信憑性が問われている。
- (68) 現在知られている毛沢東の、広い意味での詩に属する作品は、50篇を数える。1945年8月、毛沢東は延安から飛行機で重慶に飛び、蒋介石と会談した。重慶滞在中、毛沢東は、旧知の柳亜子を訪ね、柳亜子の差し出した記念帳に、1936年2月に作った詩を一首書いた。柳亜子は重慶で発されていた中国共産党の新聞『新華日報』に、毛沢東の詩と、それに唱和した自作の詩を、あわせて掲載してもらった。7日後、今度は重慶発行の権威ある全国紙『大公報』, 二作をあわせて掲載した。毛沢東の詩を読んだ

晩年の毛沢東思想と階級闘争

中国の知識分子の多くは、すっかり毛沢東の気迫に魅了され、この詩一つで、毛沢東は、当時の多くの知識分子の心をとらえ、支持を獲得した。毛沢東の詩は、日本語に直すと次のようなものである。

【沁園春 雪】

北国の風光よ／千里、氷 封じ／万里 雪 飄る／長城内外を望めば／惟だ 莽々たるを 余すのみ／大河の上下／たちまち 滔々たるを失う／山には 銀蛇 舞い／原には 蠟象 馳けり／天公と 高さを比ぶるを試みんとす／晴れし日を待ち／紅の装いと白き衣を看れば／ことのほか 妖しく艶めかしからん

江山 かくのごと いたくなまめかしく／無数の英雄をいぎないて 我がちに 辞儀をせしめぬ／惜しむらくは 秦皇 漢武／すこしく 文彩において 負け／唐宗 宋祖／稍 風騷において 譲る／一代の天嬌／ジンギスカンも／ただ 弓を引いて大鷲を射るを 識るのみ／

皆 過ぎにけり／風流の人物を数えんには／なお 今日を 看よ！

しかし、たとえ毛沢東のこの詩には帝王思想がうかがえるという批判をしても、はなはだ当を失すとは言えないであろう。

- (69) 「五・四」運動については、Chow Tse-Tung, *The May Fourth movement: Intellectual Revolution in Modern China*, Cambridge Mass.: Harvard University Press, 1960 を参照されたい。
- (70) 例えば、毛沢東は、大衆医療運動を分析するとき、次のように述べている。「この章（『張魯伝』のことを指す）に言う大衆の医療運動は、われわれの人民公社にある無料医療に似通っている。ただその当時は神道に基づくものであった。神道でも結構である。その当時は神道しか使えなかったからである。道ばたの飲食店でただで飯が食えるところが一番おもしろい。それはわが人民公社の公共食堂の前例となるものである。千六百年前のことであるにもかかわらず、貧農、下層中農の生産と消費、または人々の考えは、今とだいたい同じであり、一に貧窮、二に空白である。違っているのは生産力が今はだいぶ進歩していることだけである」、と。前掲書『毛沢東思想万歳』、『毛沢東選集』第5巻、雑誌『党史研究』、中央党学校、1987年号、特に前掲「在武昌會議上の講話」を参照。
- (71) 毛沢東は、マルクスの弁証法を矛盾論にし、対立物の統一という法則を「一分為二」（一が分かれて二となる。事物の運動・発展における対立面の分裂は不可避であるという考え）という法則に変え、「共産党は闘争を唱えなければならぬ」と主張した。ここでの矛盾論や「一分為二」も、中国の古典から取った哲学思想である。

(72) 毛沢東は、「紹介一個合作社」（「一つの合作社を紹介しよう」、雑誌『紅旗』、1958年第1期号）という論文の中で、次のように述べている。

「ほかの特徴以外に、六億の中国人のもっとも顕著な特徴は、一に貧困、二に空白である。一に貧困、二に空白は、悪いことのように見えるが、実は良いことである。窮すれば変ず、かんばる、革命をしようとする。汚れていない白い紙には、もっとも新しくもっともきれいな文字が書けるし、もっとも新しくもっともきれいな絵が描ける。」

中国人民の特徴が、毛沢東の言う「一に貧困、二に空白」であれば、もっとも貧困なのは農民であり、もっとも空白なのは青年であろう。だから、毛沢東は、農民がもっとも容易に革命を受け入れると信じ、青年がもっとも容易にイデオロギーと精神の改造を受け入れると信じている。「一に貧困、二に空白」論は、毛沢東に、農民が中国社会の本当の革命階級であるという信念を固めさせると同時に、青年が毛沢東の理想郷を作る担い手であるという信頼を強めた。「一に貧困、二に空白」という条件があったからこそ、中国人は新しい社会を作る信念を持ったのであると毛沢東は考えている。ここで、歴史発展の結果を決定する根本的な力は、人間の意識や道徳観念、献身的な精神ということになる。

(73) 中国人は、政治という尺度で是非善悪を判断することになれている。中国の伝統文化は、古来からいわゆる「忠」と「姦」という標準を設け、それをもって人の善し悪しを判断する。

(74) 独立的、具体的な個人という価値は、毛沢東の観念のなかでは、明らかに尊重されていないどころか、きわめて害のあるものなのである。したがって、個人に「自我」が少なければ少ないほど、公衆の利益の実現が徹底できるものとされている。人間が「自我」の確実な居場所と生命の具体的な意義を感じず、具体的な個人が集団に覆われまたは完全に吸収されたとき、個人が「自我」を残さずに社会にすべてを捧げて、社会的地位が均一となり、公衆というイメージに同化されたとき、このようなときにこそ、毛沢東の理想のなかにある「共産主義」が、同時に、中国の伝統文化の憧れである「大同社会」が初めて実現されるのであろう。

(75) 例えば、毛沢東をはじめとする中国共産党の指導者たちの「生活の儉約」ぶりを宣伝することは、中国の政治教育の一環でもある。毛沢東は、人民が「三年の自然災害」に苦しんでいるとき、人民とともに貧しい生活をし、革命戦争や朝鮮戦争の時、自分の家族を犠牲にし、息子まで戦場に赴かせた、などといった美談は、中国の人々を教育し、感動させたのである。

(76) 『礼記・大学』を参照。

(77) 『左伝・襄公二十四年』を参照。

晩年の毛沢東思想と階級闘争

- (78) 『左伝・僖公二十四年』を参照。
- (79) 『論語・為政』を参照。
- (80) たとえば、反右派運動の時、前述の章伯鈞元民主同盟副主席は、1957年7月16日付けの『人民日報』に、「痛改前非、全心全意為社会主義服務」（「前非を悔い、誠心誠意、社会主義に奉仕する」）という反省文をのせ、次のように言っている。「全国人民が私のような右派分子に厳正な処罰を与えようと言う要求は大変正しい。私は心からそれを受け取る。私は、自分の醜悪を憎み、旧くて反動的である私自身を徹底的に打倒し、二度と再び蘇らせないようにしたい。私は全国人民と共に反右派闘争という偉大な闘争に参加し、私自身に対する闘争も行いたい。偉大な中国共産党は過去に私を救って下さった。今日は、党は再び私を救って下さった。党と毛沢東の指導と教育のもとで、私は新しい命を得、党を愛し国を愛し社会主義を愛する立場に戻りたい」と。また、儲安平「光明日報」元編集長も、同新聞の紙上で、「私は心から自分の間違いを認め、人民に処罰を乞い、人民に投降する」と述べている。
- (81) これは、中国のプロレタリア文化大革命とヒトラーのナチス運動とが違ふところである。ナチス運動が基本にしたのは、種族優越論であるのに対し、中国のプロレタリア文化大革命が提唱したのは、道徳高揚論である。